

愛媛大学教育学部

第 112 号

同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番
愛媛大学教育学部総務係室内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-8304

E-mail : dosokai@ed.ehime-u.ac.jp



ご挨拶



高橋 治郎

愛媛大学教育学部
同窓会会長

この度、三期六年間会長を務めてくださりました奥定一孝先生のご退任を受け、同窓会会長を務めさせていただきますことになりました高橋治郎です。どうぞよろしくお願い申し上げます。これまで理事や副会長を経験してはいますが、まだ教育学部に籍を置く現役ですので、会員の皆様方のお役に立つかどうか心配しております。もちろん、同窓会会員の皆様のご援助・ご協力をいただきながら精一杯努めさせて頂く所存です。

私は、新制大学として愛媛大学が発足した昭和二十四年生まれです。この度、三期六年間会長を務めてくださりました奥定一孝先生のご退任を受け、同窓会会長を務めさせていただきますことになりました高橋治郎です。どうぞよろしくお願い申し上げます。これまで理事や副会長を経験してはいますが、まだ教育学部に籍を置く現役ですので、会員の皆様方のお役に立つかどうか心配しております。もちろん、同窓会会員の皆様のご援助・ご協力をいただきながら精一杯努めさせて頂く所存です。

しょうが、還暦や退職を機に、無性に昔の友達に会いたいという思いが強くなるようです。

昔は、愛媛(男・女)師範学校や愛媛青年師範学校、愛媛大学教育学部の卒業生はそのほぼ全員が教師になっていましたので、同級生という横のつながりのみならず、先輩・後輩という縦のつながりもきちんとありました。学校現場や広く教育界において、先輩が後輩を様々な面で指導・助言し、望ましい教師へと育て、引き立ててくれました。また、指導教官や卒論担当教官が同じ、あるいは教科別単位の集まりが毎年のようにありました。しかし、時代が変わり、団塊の世代ぐらいからでしょうか、教師を志しても教師になれなくなり、また、愛媛大学教育学部卒以外の教師が愛媛県内に増えてきました。こうした結果、愛媛大学教育学部卒の先輩・後輩という縦の関係がプツ、プツと切れていきました。さらにこれに拍車をかけるように、教職員名簿に卒業大学学部の記載がなくなり、先輩・後輩関係が希薄なものになってしまいました。

生の参加はわずかです。現役でバリバリ仕事をしているからでしょうが、同窓会とのつながりが残念ながら「同窓会報」でのみという会員が多いようです。しかし、何の恩恵も受けていない会員の方が遙かに多いというのが実態です。同窓会の理事会でいつも話題になっていることは、「会員の皆様のよりどころとなる同窓会をどう運営していくか」ということです。時代とともに同窓会の在り方や同窓会への思いが変わってきています。今後も同窓会が、年齢幅の広い会員の皆様一人ひとりに意味のある運営がおこなえるよう皆様方のご指導・ご助言を頂きながらやってゆきたいと考えています。最期になりましたが、本年度も昨年度に引き続き「愛媛大学ホームカミングデー」を十一月十二日土曜日におこないます。卒業生はどなたでも参加できますが、今回は特に、卒業後十年、二十年、三十年、……という節目の方々に来ていただき、愛媛大学や教育学部の変わり様を見ていただければと考えています。会員の皆様のご参加をお待ちしています。

目次

表紙

- 「波状」 同窓会顧問 奥定一孝
- 題字 元愛大教育学部教授 菊川 國夫
- 「ご挨拶」 同窓会会長 高橋 治郎 (1)

心 響

- 「朝顔の種」 前副会長 垂水 葉子 (2)
- 「ご挨拶」 同窓会会長 高橋 治郎 (1)

学部

- 「朝顔の種」 前副会長 垂水 葉子 (2)
- 「ご挨拶」 同窓会会長 高橋 治郎 (1)

研究

- 「コミュニケーション能力の育成」 合田みゆき (5)
- 「あいさつ」こそすべての基本 浜田 純子 (12)

表紙

- 「波状」について 同窓会顧問 奥定一孝 (11)
- 「ご挨拶」 同窓会顧問 奥定一孝 (11)

職場

- 「新米教師として」 芝 まどか (11)
- 「日々成長」 渡邊 正太 (11)

試験

- 「試験を成長へ変えて」 一色 昭宏 (11)
- 「松山・椿小教諭」 岡田 拓也 (11)

松山

- 「松山・椿小教諭」 岡田 拓也 (11)
- 「松山・椿小教諭」 岡田 拓也 (11)

教職

- 「教職の魅力って」 森山由香里 (11)
- 「教職の魅力って」 重松 直綾 (11)

松前

- 「松前・岡田中教諭」 重松 直綾 (11)
- 「松前・岡田中教諭」 重松 直綾 (11)

宇和島

- 「宇和島・津島中教諭」 山口 恵利 (18)
- 「宇和島・津島中教諭」 山口 恵利 (18)

今治

- 「今治市教育委員会と連携協力」 山口 恵利 (18)
- 「今治市教育委員会と連携協力」 山口 恵利 (18)

文芸

- 「川柳「子の育て」」 丹下 友和 (19)
- 「川柳「子の育て」」 丹下 友和 (19)

絵

- 「絵手紙「二週三絵」を目指して」 田中 勝子 (19)
- 「絵手紙「二週三絵」を目指して」 田中 勝子 (19)



朝顔の種

同窓会前副会長

垂水 葉子

(昭四八卒)

二〇一一年三月のある日のこと、「かずやさんの朝顔の種が見つかりました。」と、ニコニコしながら小さな紙袋を持ってきてくれたのは、一年二組担任の堀元朋子先生です。修業式が終わり、教室等の片付けをした後、生活料室のロッカーにあった箱に気づいたそうです。「何が入っているのだろう、子どもたちが置いたままにしている物ではないのかしら。」と中の物を確かめると、小さな紙袋に入った朝顔の種を発見したのです。裏を返すといいねいに名前が書いてありました。「かずやさんの種だ。」と気づいた堀元

先生はすぐに私のところへ持ってきてくれました。八年半も経って、かずやさんの朝顔の種が見つかったということは奇跡のような気がします。

二〇〇二年十月三十日、東雲小学校一年生のかずやさんは、下校途中、勝山町交差点の信号が青になったのを確認して横断歩道を渡っていたにもかかわらず、左折してきた大型トラックによってか

げがえのない命を奪われました。二〇〇八年四月から三年間、何度かずやさんのお宅を訪問させていただきました。そして、新聞切抜きを見せていただきながら交通安全への願いと歩車分離式に改善されるまでの経緯をお話していただきました。

「二度とこのような交通事故が起きないようにするのが残された家族の使命です。」「勝山町交差点の歩車分離の表示板はかずやの勲章です。」「やっと部屋にかずやの写真飾れるようになりました。」「毎年命日になると同級生の友達

が来てくださるのですよ。かずやはもう中学三年生になるのか、と思う一方、家族にとっては、かずやは東雲小学校一年生のままなのです。」「今度かずやに会う時まで、はずかしくない生き方をしていたいと思います。」ご家族の話される言葉が胸にしみ込んでき



堀元朋子先生と子どもたち



地域の方からの交通安全を願うお手紙・お守り



交通安全教室風景



す。自分は命の重みをそこまで考えたことがあるだろうかと反省させられました。そこで、ご家族の了解を得て、「校報しのめ」などに文章を載せ、全校朝会や集団下校時に話をさせていただきました。(できれば、いつの日か、直接子どもたちに命のメッセージを伝えていただきたいなと思っています。)

俳句「新たな命を」 池上 馨
短歌「感動を新たに」 印南 秀克
今、教育に思うこと (21)
「明治・大正の頃の教育事情」(三) 上甲 修
「少子化と学校統廃合に思う」 小野植元幸

先週、運転免許の更新講習を受けました。ICチップ入りゴールドの免許証を手にし、安全運転への決意を新たにしました。この春退職したので直接子どもとかかわる機会はめったにありませんが、自分ができることは何かを考え、小さなことから行動にうつしていきたいと思っています。

同期会 (23)
「昭和二十八年入学生同期会」 増元 晶尚
「八十四歳の在京同期会」 武田 敏文
先輩を偲ぶ (25)
林傳次先生遺稿集
「把翠」を繙く(三)

叙勲・受賞 (26)(25)
学部トピックス (26)(25)
「教育学部生が第四十回記念日彫展に

おいて新人賞を受賞」 (26)(25)
「教育学部生が研究奨励懸賞論文に おいて最優秀賞を受賞」 (26)(25)
「教育学部の牛山眞貴子教授が 第五回教育文化奨励賞を受賞」 (26)(25)
結婚相談 (27)(24)
結語 (27)(24)
会員の声 (27)(24)
「附属小学校の思い出」(一) 栗田 瑞夫
「今を生きる」 菅田 顕

平成二十三年度愛媛大学教育学部 支部長会議報告 (32)
平成二十二年同窓会役員一覧表 (34)
愛媛大学校友会館の利用 (24)
寄贈図書 (30)
「わたしと俳句」・四季吟詠句集25 山内 功

「8歳までに経験しておきたい科学」 隅田 学
同窓会への寄付者 (31)
会報送料送金者 (31)
教育学部同窓会 (30)
ホームページ開設 (30)

愛媛大と山形大合同の (35)
「第一回卒業、修了合同美術 展覧会を開催しました」 (35)

となった今回の試みは大成功でした。来年度も続ける予定です。

さて、附属学校の設置目的は、教育についての実践的研究と教育実習ですから、これらは必須です。本年度は、「未来を拓く力の育成―持続可能な社会を築くための「自立」と「共生」の力を育む指導―」をテーマとした三年研究の二年目です。個々の教員の課題意識を出発点にし、ほぼ教科単位で学部教員との共同研究を行っています。幼小との共同研究になっている教科もあります。テーマの副題にあるように、ESDの視点を教育活動に組み入れようとしています。また、研究のための研究ではなく、附属だけのための研究でもなく、そのまま教育現場に活かせる研究を目指しています。当然、新学習指導要領の実施ということも念頭にあります。特筆すべきは以下の二点です。

一つは、「行く河」の時間。養護教員と本学大学院で心理学を修了した教員の二人が協力し、学部教員の支援を得て、「自分らしさ」の大切さを生徒たちに伝えていきます。いわゆる成績の良しあしとセルフエスティーム（自尊感情）とは相関はなく、今の日本には、セルフエスティームの低い若者が多く、大きな問題になっています。本校でのこの試みは、注目されています。

もう一つ、これは大きな出来事ですが、研究大会の形態を新しくしました。ここ何年か研究大会は十一月に開催していましたが、地域の教育現場にとっても、本校にとっても、いい時期ではありませ

んでした。中学校の先生方は本当にお忙しく、皆でそろって研究に参加するというのはほとんど不可能です。多くの先生方に研究発表、研究発表を見ていただくためにはどうすればいいか。一つの試みとして、本年度は、授業研究の部と研究発表の部とを分け、後者は二月二十四日に開催し（発表のみ）、前者を、六月から八月にかけてさみだれ式に行うことにしてみました。この同窓会報が出るころは、まさに佳境に入ったところだと思います。ほぼ教科ごとに、一時間から三時間の研究授業を行い、その日に研究協議を行います。この日程と授業内容（概略）は、四月から何度か県下の先生方にお知らせしてきました。これまで通り、指導助言は、県教委の指導主事の先生や教育センター、公立の校長先生らにお願いします。研究授業は、本校教員と学部教員の共同研究で企画・実施していきます。そこに、本年度は、公立の先生にも「学外共同研究者」として参画していただくことにしました。はじめの試みですので心配な点もありますが、六月末から八月の授業研究の部、二月二十四日の研究発表の部、同窓会会員の諸先輩もぜひともいらしてください。詳細は本校HPをご覧ください。

校長先生を経験しての思い出・感想は。

附属中学校長四年目、本年度が最後の年です。校長を兼任しているいろいろなことを経験できました。今、一番大きいと思うことは、

視点の変化です。附属中学は、教育学部附属ですから、これまでも「身内」だったはずですが、そうたびたび行くことはありませんでした。教育実習の場というところの方が正直なところでした。ところが、校長ですから、いわば「自分の学校」です。附属中学の視点から教育学部、大学を見ることになりました。「実習生が行く」から「実習生が来た」に変わるわけです。もちろん、教育学部の教員でもありますから、実習生を送り出します。受け入れる、両方です。これまで、実習生を送り出すにあたって、私は、附属中学の生徒や教員のことを考えていなかったなあと、反省しました。それから、附属中学の視点で見渡すと、附属小学校や公立の小学校から、どういう子どもが「うちの生徒」になるかというの是最も重大なことがらです。そして「うちの生徒」が卒業後、どういう道を進むのか、さしあたっては希望の高校へ進学できるのか、というのも重大です。本学の附属高校へ進学する生徒もいますから、その先の愛媛大学を意識することになります。自分の職場としての愛媛大学とは別ものの愛媛大学が現れたという感じです。「うちの生徒」の行き先としての愛媛大学です。幼・小・中・高・大を、ぐるりと見回すことにならざるを得ません。附属中学の校長を兼任しないとこんな視点を持つことはなかったと思います。私は、愛媛大学への進学を希望する附属高校の生徒をどう「受け入れる」のかではなく、愛媛大学へ進学する中学生を「送り出す」立場です。附

属小から附属中への連絡入学、附属中から附属高校への連絡入学、前者は義務教育期間内、後者はそうではありませんから内容は異なりますが、今、こうした制度ができ、実施されるのは、一般の愛媛大学教員からしても理解できる自然なことだと思います。しかし、校長は、まさに当事者ですから、かなりエネルギーが必要だと思います。附属中学での経験でもう一つぜひともお話ししたいのは、いくつもの「感動」です。週に二、三日、それも校長として中学にいるのですから、けっして中学生と生活とともにしたなどとは言えません。しかし、それでも、中学生から「感動」をもらいました。また、中学校長として、特別支援学校や小学校の卒業式、幼稚園の卒園式などに出席しましたが、そこでも「感動」をもらいました。

たとえば、この三月の附属中学の卒業音楽会、三年生の全体合唱の中で、先生方への感謝の言葉がちりばめられていましたが、聴いていて、私は涙が止まりませんでした。翌日の卒業式では、私自身が「感動」した、ある生徒のエピソードを式辞の中心に据えました。実は、その下書きを書きながら、私はもう泣いていました。こういうことは、愛媛大学へ着任して、十五年になります。一度もありません。これは、私が大学教員として、学生といっしょに過ごせていなかったからだろうと思います。愛媛大学生がまじめな優等生であることをいいことに（あって）、ほったらかしにしてきたか

同窓会の会員に対して、何かご要望などありましたら。

はい。教育関係に従事しているらっしゃる皆様、ご勇退になった先輩も含め、ぜひとも附属中学の教育・研究への叱咤・激励をお願いいたします。ご指導ください。これが第一です。

もう一つは、附属学校園のご出身で、愛媛大学教育学部ご卒業の皆様がいらつしやると思います。まさに、愛媛大学の申し子とすべき方々。先輩として、ぜひとも現中学生に一言お願いします。来年度の「ようこそ先輩」でも、あるいはそれ以外でも。そのような先輩と後輩とが絆を結ぶ、そんな場面を作りたいと思います。ぜひ附属中学へいらしてください。

「愛媛大学教育学部サポーター制度」より

「コミュニケーション能力の育成」

フリーアナウンサー

台田みゆき氏講演より

今から十七年ほど前に、愛媛大学教育学部 当時の小学校教員養成課程を卒業して、南海放送に入社し、アナウンサーや、報道記者、ラジオディレクターなどを経験してきました。プライベートでは、

現在三歳と一歳の女の子がいて、子育てが忙しくなってきたり、新たにやってみたくらいなどが出てきたりして、今年八月に南海放送を退職しました。フリーアナウンサーとして、講演や司会などのお仕事を頂いています。ちなみに夫も愛大出身、年齢が少し離れてい

るので、大学時代には出会っていませんが、共通する話題があります。

大学時代の教育学部の授業は楽しかったです。高校までは生徒の立場で経験したり、勉強してきたりしたことが、大学では先生の視点で学習することができて、自分が今まで受けてきた教育の理論を学習することができて良かったです。

また、サークル活動では、高校時代までずっと吹奏楽をしてきました。大学に入ったら、何か新しいことをしたいと、放送研究会に入りました。これがマスコミ志望のきっかけになったかもしれません。FM愛媛さんでDJのオーディションに応募して、番組を担当させてもらったのは、いい経験になりました。学生の皆さんも、社会に出た時にやりたいことを想



像して、ゴールからの発想で、それに向かっていくには何をしたらいいのか考えて、いろんな方面から経験を積んでおくことは大事かと思っています。例えば、教員を目指すなら、家庭教師で、実際に生徒を指導してみる……などです。



では、今日は、コミュニケーションについてのお話と、実践をしてみましよう。

私が、南海放送を辞める直前には、ニュースCh4のコーナー取材を担当していました。金曜日のChカルチャーというコーナーで

す。自分で文化的なニュース素材を探してきたり、ネタ提供頂いたものを検討したりして、取材内容を決めます。その取材対象の方にアポイントメントとって、取材して、編集して、スタジオに生出演して、スタジオでその場で原稿を読んで、生放送する……という作業を週に二三日かけて、主に一人でやります。ディレクター兼リポーター兼キャスターみたいな感じでしようか。

取材をするという一連の作業は、コミュニケーション能力が必要ですよ。取材先には、お忙しいところお邪魔して、取材をさせて頂くわけですから、最大限の心遣いが必要になってきます。まずは、電話で、取材がOKかどうかの確認をしますが、相手は、大体、初めて電話をする方ですので、まず、電話をかける時間を気にしません。飲食店であれば、ランチ時の忙しい時間は避けて電話するとかです。次に、電話が繋がったら、

「今、お電話させて頂いてもいいですか」と確認をして、「後にしてください」と言われたら、相手のいい時間を聞いて、再チャレン

ジ。その時間に自分は、別の取材に行っていることもあるので、取材の合い間に電話をすることもありました。

電話では、わかりやすく取材内容を伝えるために、しゃべるスピードや、声のトーンなどに気をつけます。その時の気持ちとしては、相手のことを思いやる、例えば、相手のスケジュールや、取材を受けやすい環境を考えるなど、気遣う気持ちをもって接していきます。やはり気持ちというのは、電話であっても相手に伝わりやすい。なので、誠意を持って対応すれば、最初はなかなかいいお返事が頂けなかったところも、最後は取材を受けて下さることもありました。

取材先とやりとりをして、取材内容を詰めていきます。相手に用意して頂くものとか、取材にかかる時間や、駐車場の確認などなど、取材で相手にご迷惑がかからないように、打合せをしていきます。

そして、取材当日、短時間に効率よく、正確に取材。放送時に間違いがあつてはいけないので、店の表記、電話番号、値段など、しつ

かり確認していきます。

そして、会社に帰って、取材したVTRを見ながら、原稿を書き、上司であるデスクに原稿を確認してもらって、カメラマンと編集し、スタジオで生出演して、原稿を読んで……という形で、一回の放送が終わります。編集中でも、本番直前でも、「あれっ？これ合っているかしら？」と思ったところは、取材先に再度、確認することもあります。正しく伝えることが、取材先にとっても、テレビをご覧になっっている方たちにとっても、大切なことなのです。

コミュニケーションは、常に相手を思いやる気持ちが大切だと思います。殺人現場の取材だって、遺族や周辺にお住まいの方に、細心の注意を払います。相手を尊重し、相手を思う気持ちは、言葉の端々に出できます。今回の講座の案内にも「相手に思いやりの気持ちを」と書いてあります！コミュニケーションをとるのが苦手という人も、まずは、相手のことに関心を持って、気遣ってみてください。そうすれば、声が低いとか、容姿に自信がない、と自分で思っ



ていても、きつと、その人からにじみ出る人間味が、人としての深みを与えてくれて、コミュニケーションがその人なりに、とれるはずです。

ここから実践してみましよう。まずは、その思いやり。具体的に気持ちに起こしてみましよう。頭の中に思い浮かべてくださ

い。今、一番、あなたが心配している人は誰ですか？何を心配していますか？その人に、何をしてあげられたらいいか、何と声をかけてあげたらいいか、想像してみてください。

相手を気遣う、優しい気持ちになっってみましよう。

では、その気持ちをずっと持ったまま、笑顔の練習です。

口角を少し上げ、目じりを少し下げる感じをイメージしてください。

口を少し開けて、口角をぐっと上げると、最高笑顔。しかし、顔がひきつることも多いので、あまり口角を上げすぎず、自然にしてみてください。

では、知らない人同士でペアを組んで、お互いに笑顔を確認してみましよう。

相手をじつと見ると、恥ずかしくなりますよね。でも、相手を見ないわけにはいけません。

では、どこを見たらいいでしょうか。顔全体をポワンと見る感じがいいですが、それが難しければ、鼻から口元あたりを見る感じがいいかも。あまり目をじつと見たら恥ずかしいという場合には、お試

してください。次に、自分の姿勢を確かめてま

ましよう。「せめて あしふく

くせ」というので、確認です。

「せ」は、背筋を伸ばす

「め」は、目線は相手に

「て」は、手の位置を落ち着かせる

「あし」は、足をしっかり大地に

「ふく」は、服装のチェックです。ネクタイなどは真っ直ぐに。襟が立っていないか、スーツのボタンの掛け間違いはないか。初めて就活に行く時、新しいスーツは、後ろの仕付け糸を外してください

ね。「くせ」は、言葉とふるまいのくせです。最近の学生さんたちの中で、「みたいな」「だったりするじゃないですか」とか「調子」で、要らない言葉をつけるしゃべり方をする人がいますね。普段から気をつけてください。それから、語尾を上げたり、伸ばしたりしてしゃべらないように、友達同士でしゃべる時にも気をつけま

しょう。では、発声練習をしてみましよう。まずは「ロングトーン」をやっ

てま

「あー」大きな口を開けて、大きな声で、息が続くところまでいってみてください。では、

いきます「あー」。

三十秒近く、息が続いた人もいますね。

口の開け方も気をつけてください。縦長に口を開けます。息が長く続くといいことというのは、文章を読むときに、一文を続けて読むことができます。すると、文章の途中で切ることなく読めるので、相手に伝わりやすくなります。

★発声練習

①ロングトーン 「あ」

②あえいうえおあお
かけきくけこかこ
させしすせそさそ
たてちつとたと

なねにぬねのの
はへひふへほはほ
まめみむめもまも
やえいゆえよやよ
られりるれろらろ
わえいうえおわお

(鼻濁音)

がげぎぐげごご

③無声化

「いただきます」「ありがとう」「はい」「ええ」「うん」「まじい」「まじい」

次に「あ・え・い・う・え・お・あ・お」と、発声練習をしていきましよう。皆さん大きな声で、できました。

「ら行」が苦手という方もいましたが、こうして、ゆっくり何回も練習していると、克服できますよ。

きれいに話すことができるために、技術的などころで、「鼻濁音」と「無声化」というのがあります。鼻濁音は「がぎぐげご」というが行を、鼻にかけて発音します。こ

れを、しゃべっている時にどこで使うかということですが、助詞の「が」に使います。

「〜していますが、」の「が」で使うと、とても柔らかく聞こえて、耳障りがいいです。しかし、あまり鼻にかけすぎてしまうと、おかしいので、自然にできるようにするといいいですね。

続いて「無声化」ですが、文末の「〜します」の「す」の音を、有声で出すのではなく、息だけで「す」と発音します。これは、文

末の「す」に使うと、スマートなしゃべりになります。

では、次は、実際にニュースを読んでもみましょう。原稿は、こんな感じですよ。

「来年のお年玉付き年賀はがきの販売が、今日一日、全国の郵便局などで、一斉に始まりました。日本郵政グループの郵便事業会社によりまして、当初の発行枚数は、前年の最終発行枚数より、およそ二億四千万枚少ない、三十六億五千万枚の予定ですが、最終的には、前年並みの三十九億枚を見込んでいます。受け付けは、十二月十五日から、十二月二十五日までに投函すれば、元旦に配達されるということですよ。」

このニュースで、伝えたいところは、どこですか？

学生「年賀はがきの販売が、今日一日、全国の郵便局などで、一斉に始まりました。」

そう、そしてもう一つは？

学生「受け付けは、十二月十五日から、十二月二十五日までに投函すれば、元旦に配達されると

おむすびころりん

むかし むかし はたらきものの おじいさんが やまで きを ぎっておいしました。

「ころろで ちよっと ひどやすみ」

おむすびを たべようとしたら

ころころ ころん

ひとりだに おむすびが ころろはかきました。

ころろがって ころろがって おむすびは ちいさな あなへ

すると、谷かから 「おむすび ころりん すっこんどん」と かわいい こえが きこえてきました。

「ころろ ゆかい、では、こんどは わしが ころころりん」

あなな 谷かば、おむすびをのくにでした。

「ようこそ おじいさん。 さっきは おむすびを ありがとう」「おれいに ごちそういただきますよ」

おむすびたちは ゆかひに うたって おどりました。

おみやげに こぼんがはいた つづらを もらった おじいさん。

おむすびたちに おおくられて おうちへと かえりました。

いうことです。」

そうですね。この部分を特に強調する気持ちで読んでください。

また、元旦という言葉は、よく間違われやすいのですが、元日の朝のことを指します。元日の昼に「元旦」はおかしいので、気を付けてください。

続いて、「おむすびころりん」というのを読んでみましょう。

子どもにも読み聞かせることもあるかと思いますが、文章は切らないで、感情を込める。そして、相手に聞かせようという気持ちで読めば、表現力もついてきます。

(しばらく、学生さんに読んで

らう)

では、コミュニケーションを鍛えるために、ペアを入れ替えてみましょう！

前後など、話したことの無い人同士で、ペアを組んでください。

このコミュニケーションのとり方は、先日、育児勉強会で、「怒らないママになるために」というセミナーがあつて、その中で、紹介されていたものです。ママと子どもではなく、友達同士や社会でも使えると、少しアレンジさせて頂きました。

まずは、新しいペアで、二分間でお互いの共通点を探してみてください

来年のお年玉付き年賀はがきの販売が

今日一日、全国の郵便局などで

一斉に始まりました。

日本郵政グループの郵便事業会社によりまして、

当初の発行枚数は

前年の最終発行枚数より

およそ2億4000万枚少ない

36億5500万枚の

予定ですが、

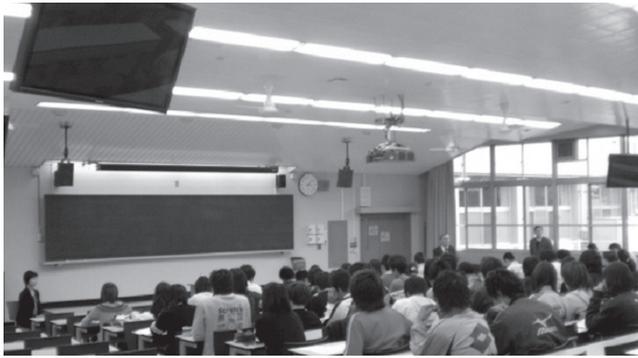
最終的には、前年並みの39億枚を見込んでいます。

受け付けは、12月15日から、

12月25日までに投函すれば

元旦に配達されるということですよ。

※日本(にっぽん) 郵政グループ



ださい。「人間」や、「女性」といった共通点もOKです。時間は二十分です。どうぞ。

(先生と学生さんというペアもあって、年の差があったお二人には、いろいろ面白い共通点が見つかりました)

こうして、まずは、相手に関心を持つことで、ちよつとしたことがきつかけで、コミュニケーションができるようになるのですよね。初対面の方とは、こうした共通点を見つけるといふところからはじめてみるというかもしれません

ん。

次に、聞き上手になる練習をしてみましょう。

テーマ「大学生活で楽しいこと」を、お互いに二分間で話してみてください。では、どちらから先に話してもらいましょうか。ペアで、お互い手を合わせてみてください。手の大きい人から、先に話してみよう。話し役の人は、二分間。テーマに沿って話す。そして、一方の聞き役の人は、相槌を打つなど、聞くだけです。二分終わったら、役割を交代させてください。では、どうぞ。

さて、実際にやってみてどうでしたか？聞くだけって案外難しいですね。相手の話をさえぎらずに聞くことって、結構苦痛だったりしませんか？例えば、年配の女性の話を聞いていると、みんなお互いに話を聞いていないってこともありませんか？私の母の会話もそうです。あるテーマで話していたのに、急に「だけど……」とか言って、違う話を持っていくのです。「だけど」っていうのは、

その話に対して、逆の話をする時に使いますよね。しかし、母は違うのです。逆接で使っているのではないのです。全く違う話、つまり、話の転換に使っているのですね。こうした会話は、自分のストレス発散にはなっても、聞いてもなかったという肯定感はないですし、逆に相手は「あれ？さっきまでの話と違うよ」と、びっくりするかもしれません。相手の話を聴くことというのは、相手を認めてあげることにも繋がります。大事なコミュニケーションですね。

聴くという漢字は、分解するんですが「耳」「心」でできています。まさに、耳と目と心で「聴く」のです!!

では、今度は、相手の話を膨らませて、会話を弾ませてみましょう。テーマは「最近のマイブーム」についてです。

さつきと同じように、話し役と、聞き役と交互に、二分間でテーマについて語ってください。で、今度は、聞き役の人は、話が弾むような質問をしてみてください。ど

うぞ。そして、終わったら、お互いを少し知ることができたと思うので、相手を肯定してあげる感想を言ってあげてください。

さあ、ここまで簡単にコミュニケーションの基礎を具体的にやってみて、いかがでしたか？よく、女性同士で「あなたの肌きれいよねえ」って褒めたら、「いやいや、もう私なんておばさんだもの、それより、あなたの方がきれいだよ」って、謙遜し合っている会話、耳にしたことないですか？これって、謙遜していて、一見いい人同士の会話に聞こえますが、褒めてもらったなら、一度「ありがとございます」って、相手のコメントを肯定してみるとどうでしょうか。それから、相手のことも褒めてあげると、相手も褒めてよかつたな、って思えますよね。

褒められたときだけではなく、怒られた時もそうです。まずは、相手の話を反論せずに聞きましよう。ふてぶてしい態度を取ったり、反論をせず、まずは、じつと聞いてみてください。社会に出ると、たまに理不尽に怒られる時もあるかもしれませんが、そういう時は、

言った本人が後で反省したり、周りで聞いていた人がわかってくれたりして救われます。

でも、大方、怒られるということは、自分に何らかの非はあるはずなんです。「どうして怒られたんだろう？」「何がまずかったんだろ？」と振り返って反省してください。怒られることはステップアップのためのプロセスのひとつです。怒られることは悪いことでも何でもない。次に同じ失敗をしないようにすることが大切です。

さて、今日は、コミュニケーションの基礎を、少しですが具体的にやってみました。今日のことから、何かきっかけを得て下さったら幸いです。思いやりの気持ちさえあれば、言葉遣いが少々下手でも相手に伝わるものです。怖がって、何もしないより、どんどんコミュニケーションをとっていったほうがずっといいと思います。

これからどんん外に出て行って、スーパーで買い物している女性にも話しかけてみてください。あごに手をあてて、肉を選んでいる女性に「このお肉、おいしいんで

すか？」でも、何でもいいんです。案外話に応じてくれますよ。見るからに忙しそうなのはだめですけどね。歩調がゆっくりしていると、じっくり品定めをしている人などは、おそらく時間的にも余裕があるので、話しかけても応えてくれると思います。

そうしていると、だんだん、ノリのいい人とかが、感覚的にわかってきます。私もスパーに行つて、お客さんにインタビューして、リクエストを頂くというラジオ番組を担当していましたが、まず、お客さんの雰囲気や遠くから見て、忙しそうでないなと思つたら、真正面からではなく、ちょっと横からとか、じっくりしない程度の後ろから、「こんにちは」と話しかけて、用件を言つて、OKだったら収録させてもらつていました。そこで「ダメ」といわれたら、すみませんって、早々に退散します。断られることを怖がってはいけません。最近では、断られるのがいやで、恋愛もしいという学生が多いと聞きました。「当たって砕けろ」ができる学生時代なのに、なぜ、そんなもったいな

い時間を過ごしているのでしょうか。断られたら、この人とは縁がなかったんだと思つて、自分磨きをしながら、もつとステキな人を見つけたらいいんです!!

実は、恋愛と就職活動は、少し似たところがあると思つています。就職活動していたら、時代も方が多いと思います。私も、アナウンサー試験にたくさん落ちて、かなり落ち込みました。アナウンサー試験というのは、特に自分を出す課題が多いので、上手くいかないと、自己否定されている感じに陥るのです。

しかし、ある時、先輩が「落ちるといふことは、あなたが悪いのではなくて、あなたとその会社の相性が良くなかつたんだから、縁がなかつたと思つて頑張つて」と励ましてくれました。確かに、不採用が続くと、落ち込むと思いません。そこで、ダメだったところは直さなければいけません。あとは自分を信じて就職活動に臨んでください。不採用があつた時には「会社との相性がよくなかつたんだな」と思つて、次に向かつて進

んでください。

そして、就職したら、とことんまでその会社で頑張ることです。とりあえず、今の時代なので、就職を何とか決めただけ、やっぱり自分の思うところと違つたと、二、三年で辞めてしまう人がいると聞きます。でも、それは違うと思うのです。

皆さん、就職活動する時は、ある程度、自分が興味を持ったところにエントリーシートを出して、試験を受けるはずなので、全く畑違いのところには、出さないでしょう。

就職すれば、会社の人間関係で嫌になることもあります。しかし、嫌な人、自分と合わない人は、どこにでもいるのです。会社を変えても、自分と合わない人はどこにでもいるのです。

仕事にやる気が出ない、自分のしたい仕事でない、と思うかもしれないですが、私だって、十七年間会社に勤めて、心から楽しかったと思う仕事は、一割もないのではないのでしょうか。しんどかったり、思うようにいかなかったり、自分

がしたいことではなかったりと、自分でやりたいと思つて選んだ職業でも、全てが楽しいわけではなかったのです。

このままいくと病気になる……とかいう場合は、考えなければいけません。内定をもらつて、働こうとおもつたのなら、その場所とことんまでやり抜いてください。

「そういう合田さんも辞めていんじゃない？」と言われたらそうなのですが、私が辞めたのは、今の仕事よりもつとしたいことができて、その準備期間が必要だったからというのがあります。前向きな視点で辞めるのは止めませんが、上司が嫌、仲間と合わない、仕事がつまらない、とかという理由であれば、そういう人は、どこに就職してもそうなります。そういう理由で職場が嫌だなど思うなら、そこでとことんまで仕事をし

て、その会社でスキルを身に付けて、次へのステップアップを見つけてから辞めるのを考えてください。

それから、学生生活の間にしておいてほしいこと。自分の就きた

い職業を早く見つけたら、そのために役立つ資格を取つて下さい。この時代だからこそ、資格は武器になります。何も見つからないようなら、英語をやつて下さい。このグローバル社会、英語は必要です。無駄にはなりません。英会話をぜひ、身に付けてください。大手企業に勤める、愛大工学部出身の友人が言つてました。英語は必要。中国がなぜ、伸びてきているかというと、商品説明が英語でできるから、どんどん売り込んでいくのだそうです。日本の商品の方が良くても、英会話力で負けているんだと言つていました。

愛大には、無限の可能性がります。学生生活を最後まで、有意義に過ごしてください。恋愛も忘れずに！ありがとうございました。



「愛媛大学教育学部サポーター制度」講師

『あいさつ』こそすべての基本！

― 初任者のためのマナー ―

株式会社グロウスリッシュ

代表取締役 浜田 純子

先日、ある企業の新入社員研修の打合せを行ったときのこと……担当の人事部長が嘆いていた一言があります。「お昼に新入社員にお茶を配ったとき、二十人の新入社員のうちお礼を言ってくれたのは一人だけだった……是非コミュニケーション力の強化をお願いしたい」というものでした。

おそらくそこにいた二十人の新人たちは皆、無意識のうちに何となく頭を下げるなどしていたはずですが、つまり、気持ちはあるのです。しかし、相手に伝わっていなかったのでしょうか。

誰しもあいさつが大切であることとはわかってはいますし、「自分はあいさつはできています」と思っています。ところが、現実には、相手に届いていないことが多いのです。もったいない話ですね。あいさつは、相手に届けなければ、全く意味のないものになってしまう

のです。

では、どのように届けられたいのでしょうか？ あいさつのコツは、次の二つです。

第一に、相手を見てしっかりとあいさつをすること。これに笑顔も加えましょう。

相手を見て挨拶するということは、大変重要です。相手の目を見てあいさつしなければ、相手は、自分にあいさつをしてくれたとは気づかないからです。

こんなことを試してみてください。スーパーやコンビニ、ショップなどで買い物をして、「ありがとうございます」と言われたとき、こちらも「ありがとうございます」と相手を見て、笑顔でしっかりと返してみるのです。

もしかしたら、相手は自分の方を見ていないかもしれません。し

かし、こちらが返すことで、相手もこちらに目を向けてくれることが多いものです。

人は不思議なもので、自分に対して何かが発信されていると感じると、反応します。このように、「届くあいさつ」が本当に大切なのです。

第二に、自分から先にあいさつを行うことです。あいさつは、先にするか、されてから返すかでは、格段の違いがあります。

なぜでしょうか？ 先にするあいさつは、「主体性」を持つのですが、あいさつを返す行為は、「受け身」だからです。つまり、先にするあいさつには、その人の「心」がより大きく働いているのです。

ところで、あいさつといえは、「おはようございます」「さようなら」「ありがとうございます」などを思い浮かべますが、実はそのほかにもいろいろな言葉があるのをご存知でしょうか。

- ・ 部屋に入るときや人とすれ違うときの、「失礼いたします」
- ・ お待たせしたときの、「お待たせいたしました」
- ・ 物を頼まれたときの、「かしこまりました（承知いたしました）」

- ・ 少し待つてもらったときの、「少々お待ちいただけますか」
- ・ ちよつとぶつかったときや粗相をしたときの、「申し訳ございません」

これらをはじめ、使い慣れておきたい言葉は数多くあります。

その場に応じて、これらの言葉が自然に出てくれば、それだけで、相手とのかわりはソフトで気持ちの良いものになるでしょう。

イメージしてみましょう。

自分が先輩に何かを教えるもらったとき、心から「ありがとうございます」と言うと、その先輩はまた教えてあげようと思うものです。

個別の保護者面談のとき、たとえ予定時間通りであったとしても教室の外で待っている保護者に対して、「お待たせいたしました」とひとこと声をかけるだけで、その方は自分を気遣ってもらった気持ちを感じています。

また、子どもや生徒たちに、教師自らいつも明るく笑顔で「おはよう」「ありがとう」など声をかけると、彼らは、教師に対して親しみやすさを感じるとともに、いつも見てくれているのだという安心感を持つはずです。

加えて、より丁寧にあいさつを決めるコツは、あいさつの言葉のあとにお辞儀を添えること。きりつとしたお辞儀を加えることで、よりさわやかな印象を与えます。

実は、「あいさつ」は、すべてのマナーの基本です。明るくてさわやかなあいさつは、印象をぐんとアップし、相手の気持ちを快くします。つまり、人間関係を円滑にする効果も大きく、コミュニケーションの基本でもあるのです。

「伝わるあいさつ」を自分の武器として、いろいろな人との心地よいかかわりを大切にしたいですね。



職場だより

新米教師として



芝 まどか
(平二三卒)

高知県出身の私は、三月に愛媛大学を卒業し、長年の夢であった「学校の先生」として、新居浜市の金子小学校で働くこととなりました。初めての土地、初めての学校、初めての先生方との出会い、初めての子どもたちとの出会い、何もかもが初めての新米教師です。

「子どもが好き！」まずそれだけの気持ちで先生になりたいと思います。愛媛大学の教育学部に進学しました。三回生の時に教育実習に行き、とても楽しく、「やはり教員になりたい！」と思い、小学校教員になりました。しかし、噂に聞いてはいましたがなかなか自分の思い通りにはいきません。毎日が試行錯誤、失敗と反省の繰り返しです。

「先生になったら、子どもたちが分かる授業、子どもたちをひきつけることのできる授業をするんだ！」と意気込んでいた私ですが、子どもたちはとても正直です。授業がおもしろくなかったとき、授業の後、「先生意味わからん、おもしろくなかった〜もうやり



たくな〜い。」といちいち私のところに報告に来てくれます。「そんなこと言わんの！」と笑って言いながらひそかに重くシヨックを受けている私がいま。しかし逆に授業がすごくおもしろかったとまでしよう、子どもたちはまた私のところにやって来て、「〇〇めっちゃおももしろかった!!」と目を輝かせて言ってきました。今まで経験したどんな研究協議より遠慮がなくシビアな授業評価だと日々感じています。

私が大学時代にやっていた良かったと思うことは、学校現場にたくさん出向き、現場の先生とたくさん関わるようにしていたことです。附属小学校や松山市の興居島での応用実習の他に、今治市の小学校で一単元分の体育の授業をさせて頂いたり、松山市の小学校



で一年間学習アシスタントをさせて頂きました。ゼミではたくさん小学校で体育の授業実践をさせて頂きました。もちろん今のよう担任をしている感覚とは全く違いますが、現場にいき実際に子どもと関わる中で、今の子ども達の現状が分かったり、子どもの扱いにも少しずつ慣れてきたりします。そして何より、現場の先生の指導法を見てたくさん学びがありました。「こんな先生になりたい！」と思える先生方にたくさん巡り合えました。今も、現場の先輩の先生方の指導法を日々見て学ぶようにしています。

しかし逆に、大学時代にもっとやっていたら良かったということ、教材研究です。大学では自分が授業をするときには教材研究をしっかりとするようにしていました。しかし実際に先生になってみると、事務作業など多くの仕事に追われ、とりあえず明日の授業を！と、とにかくじっくり教材研究ができません。私は保健体育を専攻していたので体育については勉強をできるだけたくさんしてきただけですが、小学生の主要教科の国語や算数の教材研究をあまりしていませんでした。なので今は毎日必ずある国語や算数の授業づくりに苦労しています。

大学を卒業したばかりで、初め大学気分が抜けきっていません。私は、こんな私が先生で、そして担任なんて勤まるのだらうかととても不安でした。しかし、四月八日の始業式に自分の初めて受け持つクラス、四年竹組二十九人と出逢って、一人一人の顔を見た時、この不安が、やる気になりました。

た。「この子たちが私のクラスの子ども？私が担任？」と何だか不思議な気分の私とは裏腹に、「先生ー!!」と私を認めてくれる子どもたちがいます。大学を卒業したばかりの新米の私でも、「姿勢を正せ」といえる姿勢がよくなったり、授業がおもしろかったらニコニコしてくれたり、叱るとおとなしくなったり。教師が子どもに与える影響はとても大きいのだと日々実感し、それを実感する毎に、自分の中の責任感も増していきま

最近、家庭訪問で行った家庭で、お母さんからとてもうれしい言葉頂きました。四年生では今、音読カードの横に給食チェック表をつけ、給食が全部食べられたらポケモンシールを貼るようになっていきます。手はかかりますが、子どもたちはシールが大好きだし、私も何気なく毎日やっていました。しかし、その家庭の子どもは、とても給食が苦手でも本人も気に入っていたのが、今年はシールをもらえるように頑張りを、毎日食べてシールをもらっては、家に帰って必ずお母さんに嬉しそうに見せているそうです。お母さんとても喜んでくれていました。私にとっては本当に何気ないことでも、子どもは喜んでがんばってくれて、それを見て保護者の方も喜んでくれると、本当にうれしい気持ちになりました。

毎日七時三十分には学校に行き、学校を退出するのは九時過ぎる時もあり、家に帰ってもまだ仕事が残っています。教師という仕事は決して楽な仕事ではないということを感じさせられる



日々です。しかし、明日の授業のために準備すれば準備するほど、明日が来るのが楽しみにになります。「〇〇ちゃんはどうな顔をするか。」私の頭の中は子どもたちのこといっぱいです。私はまだまだ新米で、分からないことばかりですが、今の自分にしかできないこと、がたくさんあると思います。

毎日ドタバタで余裕がない日が続いていますが、これからも自分らしさを大切に、元気に明るく、子どもたちのやる気を引き出し、子どもたちの笑顔をたくさん作ってあげることのできる教師になりたいです。

日々成長



渡邊 正太

(平二二卒)

二〇一〇年四月、私の教員人生は、四国中央市にある、中曽根小学校で始まりました。正直に申しまして、初めて勤務校を教えていただいた際には「よし、教師として頑張っていくぞ」という強い決意と「え、そこはどこ？」という動揺が心の中でせめぎ合っていました。勤務校決定後、私の最初の仕事は地図とのにらめっこでありました。



私の出身地は、南予にある長浜町（現在の大洲市）であります。肱川の河口に位置しており、長浜大橋（通称「赤橋」）が目印です。この長浜大橋は、船を通すために中央部分が跳ね上げ式になってお

ります。毎週日曜日の午後一時には、点検を兼ねて、今でも稼動しておりますので、是非実際にご覧になってください。また、冬には肱川あらしという現象が起こります。こちらは、大洲盆地と肱川という地形が影響して起こる現象です。どういう原理で起こるのかは難しいのですが、とにかく、冬の朝に起こる現象で、川沿いの町が霧と風に包まれます。凍て付くような寒さなので、自転車通学の場合には手袋が必須です。機会がありましたら、是非お越しください。そんな長浜から中曽根小学校までは、車で二時間弱です。決して通えない距離ではないです。……いえ、通えない距離ですね、きつと。大学時代に引き続き、こちらでも一人暮らしが始まりました。新採一年目の四月当初は、大学生活と社会人としての生活とのギャップに四苦八苦ししていました。のんびりしていても余裕で間に合っていた朝の時間は、社会人になってからは、秒針との戦いの時間となりました。十分や五分の重みどころか、秒単位の重みを日々実感しております。子どもたちに笑顔をお返し、子どもたちにはほど遠く、溜まった疲れを子どもたちの笑顔で癒やして、子どもたちに元気を分けてもらうなんていう、元氣玉さながらの生活をしていました。おかげ様で、数カ月が経過すると生活にも慣れ、自分なりのライフスタイルができました。ただ、そのライフ

スタイルの中に、コンビニ弁当やインスタント食品、スーパリーの惣菜が組み込まれていることに、多少……いや、多大な危機感もっております……。職場内での健康診断後には、保健の先生から食事に関するありがたいお話+体のことを気遣った言葉をいただきました。どなたかこの生活を脱する、画期的な打開策がありましたら、ご一報ください。昨年一年間は先輩の先生方に手取り足取り教えていただき、また、温かい保護者や地域の皆さんに支えられ元気に過ごしてこれました。もちろん子どもたちもとても素直で明るく、人なつっこくてすぐに打ち解けることができました。「親ばか」ならぬ、「先生ばか」かもしれないですが、すてきな子どもたちに囲まれた職場です。ただ一つ、自分を（多少）苦しめた問題は「方言」です。自分自身、そんなに方言が強いわけではないのですが、たまに出ています。先日も、授業中、少し騒がしくなりました。十分や五分の重みどころか、秒単位の重みを日々実感しております。子どもたちに笑顔をお返し、子どもたちにはほど遠く、溜まった疲れを子どもたちの笑顔で癒やして、子どもたちに元気を分けてもらうなんていう、元氣玉さながらの生活をしていました。おかげ様で、数カ月が経過すると生活にも慣れ、自分なりのライフスタイルができました。ただ、そのライフ

もつかの間、一瞬の沈黙を破って、一人の男の子がこんなことを言うてきました。「え、先生しゃべっていいんですか。」「……………」何を言っているのかわかりません。「この子とはんちでも言っているのだろうか。」などと考えるが、自分の発言を振り返ってみると、どうやら「方言」が原因のようです。私が言った「しゃべりなや」とは、こちらでは「しゃべってよ」「しゃべったら？」という意味だったようで……。いやいや、そうじゃなくて、しゃべらないでよ、しゃべったらいけませんよっていう意味なんだけども……。なんて言いながら、苦笑い。言葉の難しさと奥深さを感じました。一年以上が経過したといっても、まだまだ私の教員人生は始まったばかりです。できていないことはたくさんありますし、やらなければならないこともたくさんあります。さらに今年は、学校全体を動かさなければならぬ場面も出てきます。愛媛大学で学んだ「出会いを大切に」ということを忘れず、成長し続ける教師でいたいと思います。

799-0413 四国中央市中曽根町 一六七二一一四〇七

表紙作品について

「波状」二〇〇六年

作者 奥定 一孝 (昭三八卒)

退職後に開いた個展を機に、教育学部に寄贈させていただいた作品です。

これまで、色面を「積層」のごとく設え、それらが互いに融合しつつ呼吸するかのよう広がっていく、そんな絵画空間を志向してきましたが、そういった動機が、幼い頃の海浜の波打ち際の体感に由来していることに気付かされた、私にとつては一つの転機となった作品です。

略歴

- 一九四〇年 愛媛県四国中央市土居町に生まれる
- 一九六三年 愛媛大学教育学部卒業
- 一九六三年～六八年 愛媛県立今治南高等学校勤務
- 一九七三年 東京芸術大学大学院美術研究科修了
- 一九七三年～七五年 東京芸術大学美術学部非常勤講師
- 一九七五年～二〇〇六年 愛媛大学教育学部勤務
- 一九九九年～二〇〇四年 愛媛美術教育連盟会長
- 二〇〇五年～二〇一一年 愛媛大学教育学部同窓会会長
- 現在 愛媛大学教育学部同窓会顧問

愛媛県立美術館 南海放送サンパーク美術館 ミウラト・ヴィレッジ等で個展 「子どもの絵は生きている」「伊予の画人」「スクリブルから見た子どもの描画に関する一考察」等の論文、著書がある。

試練を成長へ変えて



松山市

椿小教諭

一色 昭宏

(平二三卒)

愛媛大学を卒業し、教師としての第一歩を歩み始めて、早一年が経ちました。何もかもが真新しく、緊張しっぱなしの日々を懐かしく感じます。

子どもからも、保護者からも、先生からも信頼される教師を目指し、胸躍らせて赴任した椿小学校——。しかし、この一年間を振り返ると、思っていた以上に試練の連続でした。

大学生から先生になった四月、最初の試練が待っていました。それは、「初めての出会いに何を話そう。どんな子どもたちだろう。」と心配半分、期待半分の中で迎えた子どもたちとの最初の出会いでした。

私が初めて受けもった学年は三年生でした。さっそく始業式の日には、元気いっぱい新しい先生に興味津々の子どもたちに、あれやこれやと質問攻めにあいまして。「先生の歳は、いくつですか?」「得意なことは何ですか?」などと目を輝かせながら質問してきた初めての教え子のことを私は

一生忘れないと思います。そんな子どもとの出会いを無事に終え、次に訪れた試練は、日々の授業でした。

大学時代に模擬授業をしたり、教育実習において授業をさせて頂いたりしました。しかし、教師になつて、実際に子どもたちを前に授業をするのは、とてつもないプレッシャーでした。三年生には難しい言葉を使って説明してしまい、首をかしげられたり、発問の意図が伝わらず、まったく意見が出なかつたりするような授業が続きました。日々失敗の連続で、子どもたちに本当に申し訳ないという思いでいっぱいでした。

しかし、この子どもたちのために下を向くわけにはいかないといい思いで、授業にも向き合っていました。その甲斐あつてか、最初は退屈そうにしていた子どもたちも、次第に授業に一生懸命取り組み、自分の意見もしっかり発言するようになりました。学年の最後には、算数が少し得意になつたと手紙をくれた子どももいました。「教師として最も重要な仕事の一つは授業。」ということを実感した経験となりました。そして、次に訪れた試練は、九月に行われた運動会でした。まだまだ残暑が厳しく、教師さえもフラフラになりそうな環境の中での練習でした。その中で団体競技は、

非常に心に残っています。最初に学年練習で競争してみると、我が学級は最下位でした。子どもたちにも、仕方がないというあきらめのような様子が見られました。私はそんな子どもたちの姿を見て、この時こそ子どもたちが成長できる最大のチャンスであると感じました。

それ以降、子どもたちと話し合い、作戦を考えたり、何度も何度も練習を重ねたりする中で、子どもたちの心の中に勝ちたいという思いが生まれていました。すると、本番前の最後の練習では、学年で一位になりました。そのときには、子どもたちと一緒に飛び跳ねて喜び合いました。本番では、惜しくも三位という結果でしたが、本当に悔しそうな子どもたちの姿に成長を感じ、改めて教師のやりがいを感じる事ができました。

その後、勝ちたいという思いは、ITスタジアムにおける八の字ジャンプ5での取り組みにも生かされました。一学期には記録が全く伸びず、半分嫌々になっていた子どもたちが、運動会を境に、記録更新に向けて一生懸命取り組むようになりました。そして、新記録を何回も更新し、その度にみんなが喜び合いました。みんなが声がかかるほどの大声を出して励まし合い、引っかけたときには、「ドンマイ。」や「次頑張ろう。」

という声が聞かれるようになりました。その瞬間、学級が一つにまとまったように感じたと同時に、教師としての楽しさを実感することができました。

十二月には、最大の試練が待ち構えていました。それは、初任者研修における全校授業研究です。私は、大学生時代に体育科を専攻していたため、体育科における跳び箱運動の授業を行うことにしました。椿小学校の体育館には、埋め込み型のプラスチックプレートやウェブカメラなどが設置され、体育科の授業を行うための素晴らしい環境が整っていました。そこで、それらをうまく活用して、子どもたちのかかわり活動を活性化させた授業をしたいという思いをもって教材研究に臨みました。子どもたち同士のかかわりはどうか、教具とのかかわりはどうかなど、学年の先生方と何度も話し合いました。その時、準備体操の声掛け一つ、跳び箱の配置の仕方一つをとっても重要な理由があることを知り、体育科の奥深さを思い知らされ、大きな衝撃を受けたことを覚えています。そして、私はこれまでの授業では、安全面や子どもへの支援や言葉掛け一つ一つに気を配ることができていませんでした。この経験を通して、自分の授業観が変わり、自分自身大きく成長できたと感じています。

授業研当日、寒さにも負けず、力一杯活動する子どもたちの姿が見られました。このときの子どもたちの姿が見られたことは、一年間で最も嬉しかったことの一つです。

初づくしの一年間を無事終えて感じたことは、教師の大変さ、教師のやりがい、教師の楽しさ、支えて下さった先生方への感謝の気持ち……。数え切れない教師としての出来事一つ一つを大切に、一刻も早く誰からも信頼される教師と認められるように精進していきたいと思えます。

791-8044

松山市西垣生町

一一七九一二



これまでの教員生活を
振り返って



喜多郡内子町
大瀬小教諭
岡田 拓也
(平八卒)

愛媛大学を卒業して十年以上がたちます。この欄の寄稿者の条件である「若い会員（できれば新採の方、または五年から十年くらい体験者）」に当てはまるかも微妙な年齢になりました。しかしながら、そんな私に声がかかるくらい、都市を離れた郡部での「若い会員」の減少は深刻なようです。私がこの職を目指したのは、小学校高学年のときに担任していただいた先生へのあこがれからです。その先生は、明るく、大らかで、人間味にあふれる方でした。授業の合間には、登山や世界旅行の話をしてくださり、みんな夢中になって聞いていました。愛媛大学に入学し、教員免許を取るために多くの授業を受けました。一番に残っているのは、音

楽の授業です。音楽が大の苦手だった私は、追試の末にやっと「可」をもらいました。今でも、大学に行くことがあると、何度も通ったピアノ部屋が懐かしく思い出され、教育学部棟の最上階を見上げてしまいます。

昨年の夏も愛媛大学での研修会に参加する機会がありました。新しい建物がたくさん増えていること、そしてそのどれもおしゃれなことに驚きました。

教員採用試験でどんな問題が出たのか、また自分がどんなことを答えたのか、今ではほとんど覚えて



ていません。しかし、論文で書いたことは今でもはっきりと覚えています。それは、「私は目線を大切にしたい教師になりたい。子どもの目線で物事を考えたり、子どもの目線まで下りて向かい合ったりしたい。」ということでした。

おかげさまで、その論文を書いた年に、教員採用試験に合格しました。学科や実技、面接などいろいろな試験がありましたから、一概には言えませんが、その論文で私という人間が教師として採用してよいかどうか判断されたのかもできません。ですから私はそこで、「目線を大切にしたい教師になる」と宣誓したことになります。

しかしながら、近年、その初心を忘れ、効率よく仕事をすることや結果にばかり目が向いているような気がします。

今、微妙な年齢の私に、この寄稿の依頼をいただいたのは、恩師の姿や教員採用試験での宣誓に反している、今の自分の姿を省みる機会を与えられたのかもしれない。「初心忘るべからず」です。これまでの教員生活を振り返る

と、いろいろなことがありました。久万高原町では、マイナス六度という寒さを経験しました。そんな日は、ひざの上まで積もった雪をかいたり、凍結した道路を通う児童の登校指導から一日がスタートします。その学校には、「雪遊び集会」があり、雪だるま作りや雪合戦で盛り上がりました。

校舎の建て替えも経験しました。取り壊し前と完成後の二度の移転作業は大変でした。空き教室を仮の職員室とし、小さな児童机に座って仕事をしたことも懐かしい思い出です。

母校にも勤めました。その結果、そこには、卒業生として私が写る写真と、卒業生の担任として私が写る写真が飾られています。不思議な感覚です。さらに、数年後には娘の卒業写真も並ぶ予定です。幸せなことです。

現在勤める学校には、三十アーもある広大な畑があり、地域の方々と協力して管理しています。夏には一面にヒマワリが咲きます。そして、児童と地域のお年寄りが交流する「ひまわりフェス

ティバル」があり、俳句作りや宝探しなどを楽しみます。また、保護者や地域の方々と交流する「ひまわりピアガーデン」もあります。その畑の一角には石窯があり、その窯で焼いたピザやパン、生ビールなどを楽しみます。

これまでの生活を振り返ってみると、いろいろな学校に勤務し、いろいろな経験をし、いろいろな人に出会っていることに改めて気づきます。そして、学校によって、あるいは年、日によって仕事の内容が違う教師という職業のおもしろさを感じます。

また今度、自分の生活を振り返ったときに、「教師ってやっぱりおもしろいなあ」と満足できるよう、明日からまたがんばりたいと思います。忘れかけていた初心を大切に……。

791-3502 内子町寺村一〇七二



愛媛大学での 学びと今



愛大
附属中教諭
森山由香里
(平一二卒)

昨年、久しぶりに大学のキャンパスを訪ねた。愛大ミュージアムで研修を行い、その後学生食堂で食事をした。食堂や、さまざまな校舎が新しくなり、ずいぶんきれいになっている。通っていた当時より都会の風が吹いている印象を受け、なぜか少し寂しさを感じた。そんななか私をほっとさせたものは、笑いあう学生たちの元気な声のほか、構内に生えている多くの植物であった。タンポポであり、ニワゼキショウであり、オオバコであり……。

構内の植物を写真に撮っていた学生時代に一瞬戻ったように思われた。当時、担当の先生の一眼レフカメラをお借りして、構内の植物の写真をたくさん撮った。卒業研究の一つとして植物図鑑のようなものを作ろうとしていたのだ。研究のキーワードは「身近な」であった。子どもにとって身近な図鑑を作りたい。当時、子どもたち

が夢中になっていたカードゲームのような要素を取り入れたカード図鑑はできないのか。結局、植物のたねのカードを作成した。シロツメクサのたねなどは、顕微鏡で見ると、ハートのような形で実にかわいらしい。そうした新鮮な出会いを子どもたちにも味わせたいと願っていた。

卒業後半年して、初めて講師として小学校で勤務することとなった。担当したのは、四年生のクラス。年度途中からの子どもたちとの出会いであったが、当時、その学級では「ぼくの木、わたしの木」という活動を四月から行っていた。これは、自分の好きな校庭の樹木を一本決めて、一年間継続観察する活動である。それならば、わたしの木カードを作らせた。秋には担当する樹木の葉をラミネート加工させ、春には一年間の発見をカードにまとめさせた。ラミネーターに葉を入れるとき子どもたちがわくわくと楽しんでいった様子や、出てきた標本を何度も眺めていた様子は、今でも思い出される。ある男子児童は、キリを観察していたのだが、キリの葉が大きく、ラミネーターになかなか入らず苦労したことも懐かしい。他の小学校でも、学級の児童と協力して、植物図鑑を作成した。

また、鳥の中学校に赴任したときには、特別支援学級の理科を担当した。担当した生徒は、機器の扱いに関心が高かった。そこで、四季の植物を写真に撮り、パソコンを用いて編集し、説明文を加えて、植物図鑑を作らせた。

大学時代の教育実習も思い出深い。担当が小学五年と決まってきたとき、どんな授業をするか構想を練った。まず、学習指導要領と教科書を見て、五年生が二学期以降、どういった内容の学習をするのかを調べた。調べていくうちに、花の役割についての授業をしたいという思いが高まった。内容が決まった後、研究室の理科教育雑誌で、先行研究について調べた。受粉の実験や、花粉管の様子を観察する実験など、すぐれた実践がたくさんあることを知った。実際にいくつか行ってみて、私自身、花という教材の面白さに引き込まれていった。子どもたちには、花は子孫を残すためになくてはならない大切な器官であることを気づかせたい。

研究授業当日、子どもたちにこれは花だと思わせるを持参させた。子どもたちは思い思いの花を持ってきた。それらを比較させ、共通点、差異点を見つけさせるなかで、おしべ、めしべの存在に気

づかせていった。そして、花とは何だろうと考えさせた。技術的には未熟な面ばかりであっただろうが、伝えたい思いがはっきりしていた。

当時と比べて、今の自分はどうだろう。数々の授業をしていくなかで、あの教育実習のときの思いを忘れてはいないだろうかと反省することがある。私自身が教材の魅力に引き込まれたり、伝えたい課題の輪郭がはっきりしていたりするときは、生徒が生き生きと深く学んでいるように感じる。教育実習のあの日、とにかく花の役割を伝えたかった。私自身が花の魅力にとりこになっていた。がむしろで荒削りな部分はあっただろうが、当時の自分に学ぶことも多い。



愛媛大学で学んだ四年間。先生方に、仲間に支えられて、すばらしい環境のなかで、多くの貴重な経験をさせていただいた。その学びの一つ一つが、現在の教育活動にも深くかかわっている。実はそのことをしっかりと自覚していなかったが、この原稿依頼を機に、振り返ることができた。卒業して十余年。ここで、初心を思い起こす機会を与えていただいたことに深謝したい。

さて、今、花粉管の授業に向けて奮闘中である。花粉管が伸びるところを観察するのが好きだ。生命力を感じる。たくましさを感じる。瑞々しさを感じる。昨年はカラスノエンドウを用いたが、ほかに、よい素材はないものか。現在、インパチエンスやブライダルボールで試している。砂糖の濃度は何%がよいのだろうか。カバーガラスの有無はどちらがよいのだろうか。教育実習のあのときを思い出しながら、実験中である。観察したときの生徒たちの生き生きした顔を期待しながら。

790-0911 松山市桑原

二一九一八

教職の魅力について



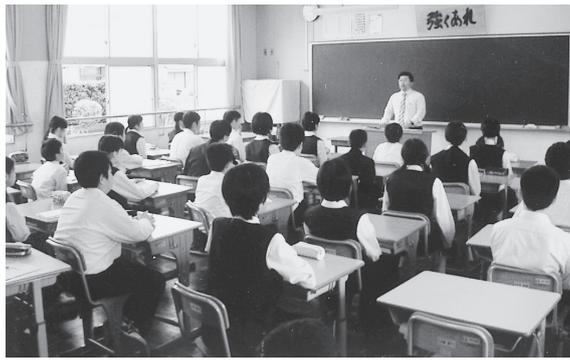
松前町
岡田中教諭
重松 直綾
(平一四卒)

人によく「なぜ教師という職を選んだのか。」と聞かれることがある。細かいことまで話すとなると長くなるが、端的に言うと、自分なりにその魅力を感じたからだとと言える。その魅力って何か？最初、人を育てることであると感じていた。私の好きな著名人の一人である野村克也氏も、人を残すことの大切さを語っている。同感である。しかし、まだまだ短い教職生活ではあるが、違うところに見い出してきた。

私自身、大学在学中に少し変わったアルバイト（アルバイトと言ってもいいのか、やや疑問はあるが）を経験させていただいた。それは、ラジオパーソナリティーである。エフエム愛媛、夜七時から九時までの二時間、生放送のリクエスト番組で約一年間パーソ

ナリティーを務めさせていただいた。ラジオにはテレビ等の他のメディアには無い魅力があった。それは、人と人とのダイレクトなやりとりが、リアルタイムで展開される場所であった。パーソナリティーが話したことや、リスナーから送られてきたメッセージの内容への反応が非常に速かった。喜びを共に分かち合ったり、楽しい事を共有したりする中で、互いに悩み相談に乗ったりと、密なやりとりがあった。

これは、まさに教職の魅力に直結するところがある。生徒とのやりとりがまさに、ラジオでの人と



人のつながりと同じではないかと感じている。教師が投げかけた言葉に、生徒は敏感に反応する。また、教師の生徒への関わりひとつで、生徒自身が良くも悪くも変わる。さらには、生徒一人の悩みをみんなで考えたり、一人の喜びをクラスや部活動、さらに学校全体の喜びとして共有する。そこに、教職の魅力を大いに感じる。

一時間の授業を、一つのラジオ番組組であるように感じるがよくある。例えば、数学の時間であれば、一つの計算法則を覚えさせるための方法はその計算法則をただそのまま教え込むのではない。生徒にその計算法則を、なるべく身近なことを例に挙げながら紹介する。また、紹介した時の生徒の反応を肌で感じて、良ければそれを基にして話題をふくらませていき、悪ければ、別の引き出しにある話題を使って紹介するようにする。さらに、生徒一人ひとりによって感じ方が変わってくるので、支援の仕方も変化させていくのである。そのやりとりの中で、それまでいまいち反応が悪かった生徒の

口から、「あー」とか、「そうかあ。」などの反応があると、この接し方で正確だったのかと、えも知れぬ快感を得ることができるのである。この生徒とのやりとりについては、大学時代に経験したラジオのパーソナリティーで身につけたことが、役に立っているのではないかと感じる。

ラジオで身につけたものが生かされていると感じる場面としては、道徳の時間を挙げることできるだろう。むしろ、数学の授業よりも、道徳の時間の方が、生徒とのやりとりや考えを深め合う場面が多くある。よく考えてみると、まさに道徳の時間の五十分こそ、ラジオの生放送を五十分やっている感じである。教師側から、一つのテーマに沿った物語などを、あの手この手で生徒の興味・関心をひきつけながら、提示する。提示した後、一つのめあてとする道徳価値に近づけていくため、生徒全員とのやりとりが始まっていく、ある一人の生徒の意見を学級全員で広げていく。一方で、一人の生徒の意見をもとにして、さら

に別の生徒の意見と戦わせることもある。それらのやりとりの中から、新しい価値観に出会わせたり、自分の中に存在していたものの気が付いていなかった心に気付かせる。道徳の時間こそ、生放送のライブ感が求められるのではないかとと思う。その時、その時によって生徒の反応が異なってくる。まさに、ラジオのライブ感そのものではないだろうか。

毎日、このようなライブ感たっぷりの授業が繰り返られる。この生徒とのやりとり一つひとつに、教職の魅力が詰まっているのだと思う。このライブ感たっぷりの毎日を楽しんで教師生活を歩んでいきたいと思う。

松山市南吉田町
九七六一九



溢れんばかりの 愛情をもって 「ここにいびり」の 教育を



宇和島市

津島中教諭

山口 恵利

(平一八卒)

早いもので、私の教員生活も六年目を迎えました。振り返ってみると、愛媛大学で過ごした四年間は、サークル活動やふれあい実習、ボランティア活動などを通して、たくさん子どもたちとかわかることができ、本当に充実した日々でした。

大学を卒業後、私が最初に赴任したのは、母校である城東中学校でした。偶然にも、校長先生を始め、中学校時代にお世話になった先生方と一緒に働かせていただくことになりました。母校で教員生活スタートできることの喜びと多くの不安を抱き、私の教員一年目が始まりました。

これまでに講師の経験がなかった私は、最初は授業の進め方はも

ちろん、職員会議で話し合われている内容も生徒とのかかわり方もよく分かりませんでした。分からないことは先輩方に聞きながら、何とか日々の仕事をこなしていました。

教員となって私が一番悩んだのは、生徒との人間関係づくりでした。ある日、授業や部活動で毎日かかわっていた生徒から、「先生は、先生という感じがしない。おねえちゃんみたい。」と言われてしまった。教師としての自分に自信がなかった私は、生徒に対しても遠慮しながら接していたのだと思います。こんな私が指導を行っても、うまくいくはずがありません。自分の思いがなかなか伝わらず、悔しい思いをすることもたくさんありました。

こんな自分を変えたくて、授業だけでなく朝の会や終わりの会、給食の時間など、できる限り学級に足を運び、先輩方の姿を見て学ぶことから始めました。生徒の中に積極的に入り、一緒に過ごしているうちに、だんだんと生徒とのかかわり方も分かるようになりま

した。

教師という仕事の楽しさが分かり始めた頃、初任者研修で道徳の研究授業を行うことになりました。授業を行うことになったのは、生徒との人間関係づくりが一番悩みながらも、副担任として毎日通い続けた二年生の学級でした。友達同士のトラブルが多かったこの学級のために、「思いやり」に関する教材を作り、研究授業に臨みました。授業は予定通りには進みませんでした。一人ひとりが友達の気持ちを考え、優しさ溢れる意見を発表してくれました。

私が一番嬉しかったことは、普段はふざけてばかりいる生徒が、言葉を選びながら一生懸命に自分の意見を伝えてくれたことです。かわり方で悩むことが多かった生徒たちのいつもとは違う姿を見ることができ、今までの努力が報われたような気がしました。

授業後、いつも見守ってくださっていた先生方が、「みんな頑張って発表したね。今まで先生と一緒に過ごしてきた人間関係が

れたんよ。」と言って励ましてくださいました。

この研究授業をきっかけに、私の生徒に対する考え方が少し変わりました。反抗的な態度をとったり、素直に行動できなかったりする生徒も、心の中では様々なことを感じており、そして教師を一人の人間としてよく見ていると考えられるようになりました。そして、本気で粘り強くかわれば、思いは必ず伝わるということを学びました。その後は、うまくいかなかったり悩んだりすることもありますが、心の距離が近くなった生徒との時間を楽しみながら、無事教員一年目を終えることができました。

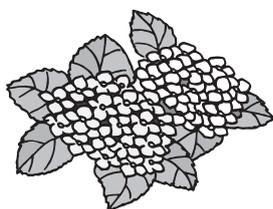
あれから五年が過ぎ、私自身にも大きな変化がありました。一昨年前に息子を出産し、母親となりました。そして、約一年半の育児休暇を終え、この四月に津島中学校に復職しました。育児と仕事との両立で多忙な毎日ですが、生徒の笑顔あふれる現場にまた戻ることができ、本当に嬉しく思っています。

私自身が子育てを経験し、今までは考えることのなかった親の気持ちだが、今となっては少しずつ分かり始めたような気がします。息子と過ごす中で、子どもの小さな成長がこれほど待ち遠しく、子どもの笑顔でこれほど幸せな気持ちになれることを知りました。生徒とかわかる際、毅然とした態度を心掛けながらも、心の中では溢れんばかりの愛情をもって接していきたいと思えます。

最後になりましたが、この場をお借りして、今までお世話になった方々に感謝の気持ちを伝えたいと思います。本当にありがとうございます。

☎ 798-3302

宇和島市津島町
大字高田丙三三三〇



今治市教育委員会と連携協力

平成23年4月21日(木)、教育学部は、今治市教育委員会の高橋実樹教育長を迎え、同委員会との平成23年度の連携協力事業の調印を行いました。

教育学部はこれまで、愛媛県教育委員会、松山市教育委員会、今治市教育委員会、伊予市教育委員会、松前町教育委員会、東温市教育委員会とそれぞれ連携協力の覚書を交わし、その活動を通して、教育研究、教員研修、教員養成について多くの成果を挙げてきました。



握手を交わす壽教育学部長と今治市教育委員会高橋教育長

今治市教育委員会とは、平成15年の覚書の調印以来、継続的に共同研究を行っており、『研究報告書』（愛媛大学教育学部・今治市教育研究所）の形でその成果をまとめています。今年度は、昨年度に引き続き、「確かな学びを保障するカリキュラムの開発と授業の創造」というテーマで研究を推進することとしました。その趣旨は、「教育現場の諸問題の解決のために、理論と実践の一体化による研究を推進するとともに、教師の創意工夫を生かした授業を創造し、児童生徒に多様で確かな学力を身につけさせる」というものです。

教育現場の具体性に即した継続的な研究の成果が期待されます。

学内最近のニュース

教育学部留学生歓迎会を開催

平成23年4月28日(木)、愛媛大学校友会館において、教育学部留学生歓迎会(前学期)が開催されました。

教育学部では、平成22年度から前学期・後学期の学期始めに留学生と教育学部長、指導教員、留学生チューター、事務職員などが一同に集い、留学生歓迎会を開催しております。

本学部留学生は、今年度4月から新たに12名を迎え、現在24名が在籍しています。

歓迎会は、50名近くが参集し、校友会館2階のサロンにおいて、12時10分から立食パーティー形式で行われました。

最初に教育学部長の挨拶があり、4月に来日した留学生がそれぞれ流暢な日本語で自己紹介を行いました。その後、和やかな雰囲気の中、パーティーが行われました。留学生、チューターの学生さん達はお互いに自己紹介をしたり、記念撮影などをして友好を深めていました。



パーティ風景(1)



パーティ風景(2)

HP愛媛大学アートフォーラムを立ち上げました。

愛媛大学地域創成研究センター3-2グループの4名が、HP愛媛大学アートフォーラムを立ち上げました。(壽、千代田、岸(教育学部)、高安(法文学部))

愛媛大学アートフォーラムは、大学でのARTを紹介したり、ARTにまつわる知や情報を発信したりするサイトです。英語のARTは、日本語では「芸術」とも「アート」とも言われますが、「芸術」のほうは教養文化との結びつきが強い語であるのに対して、「アート」は教養文化の周縁にあるものを包み込もうとするエネルギーを感じさせる語です。

近年では「アート」の語のほうが好きで用いられるようになりましたが、大学という場において求められることは「芸術」と「アート」の橋渡しをすることだと私たちは考えます。それは、過去と未来とを結ぶことでもありますし、社会と個人とを結ぶことにもなると思います。このサイトでは、大学発のさまざま表現とコミュニケーションの可能性を発信していきます。愛媛大学アートフォーラム (<http://www.ed.ehime-u.ac.jp/artforum/>)



能「隅田川」舞台背景制作 水引によるテキスタイル造形 千代田恵子

文芸



川柳

子の育て



丹下 友和
(昭三三卒)

早く芽を出せよ伸びよで萌やしつ
子 伸びる子の芽は伸び伸びと育てね
ば 贅沢に育つた子等のせぬ我慢
叱り方こつを知ってる低い声
叱り方下手で反感ばかり買う
子を叱るそしてそしてとくとど過ぎ
る

褒め上手叱り上手に子は素直
あれこれと一度に叱り子は迷う
花も実もあるから虫も寄って来る
なぜ悪い子どもに分かる叱り方
叱らずに善悪諭す子の嫉
駄駄つ子も褒めてうれしい顔にな
る
風の子と言ったはテレビ無い時代

のんびりの取り柄ストレス溜まら
ない
仏にも鬼にもなつて子の育て

(☎) 791-1104 松山市北土居五丁目
一三九

絵手紙

「一週三絵」を 目指して

田中 勝子
(昭五十卒)

教員は、年度末・始が、多忙で
ある。異動があると、なおさらだ。



北海道の
すずらん
いい
香りです。



パンジー
ゼラニウム
いかに
花だね。



はばたん
よ
ぼたん



セシネ
イシタマユ
これも
らんです。



ちまご
ふぶりな
初物の竹の子

「気が付けば、桃も桜もなかりけり」、今年度は、特に、そんな心境だった。
従って、我家のごく狭い庭も、冬枯れたままであった。しかし、自然は、偉大である。五月の連休の頃になると、宿根草や花木が一斉に花を咲かせ、にぎやかになった。今ぞ、とばかりに、あわてふためいてかいたのが、これらの絵手紙である。
さて、昨年末のテレビで、感銘を受けたことがある。それは、

九十歳を越えた男性が、「一日一絵」を実践しておられることだった。七十歳から始めて、文字通り、一日も欠かさず、身内の結婚式の日も葬儀の日も、かき続けたと言う。山のように積まれたスケッチブックに、圧倒された。そして、この度、美しい一冊の本となって出版されたのだった。
その方から見れば、私なぞ、ひよつ子である。始めるのに遅くはない。お正月に、さっそくスケッチブックを購入した。「一日一絵」

(☎) 791-3102 伊予郡松前町北黒田
七三八

は、無理でも、「一週三絵」ぐらいは、できるであろう。今、やつと、二冊目に入っている。
続けているうち、目標ができた。一つ目は、花なら、どんな花でもかけるようになること。二つ目は、できれば、いつか、一冊の本にまとめること。もちろん、自費で。

俳句

新たな命を

池上 馨

(昭一八卒)

学生時代に徴兵検査を受けた。思いもよらず、戊種合格。悶々の日々であった。

ところが、小川太郎(俳号太朗)先生の英語の時間、橋本徳壽や伊藤左千夫の話となり、船大工や牛飼が歌を作り、医師や教師が俳句を作るといったことで、新しい歌や俳句が生まれると力説され、授業をしめくくられた。何かと消極的な私ではあったが、早速に図書館長でもあった先生をお訪ねした。「君、俳句をやるか」と感動をもつて応えてくださった。あゝあゝの先生の顔を忘れることができない。直ちに先生主宰の校内の俳句会に参加した。また、先生のお宅へもお訪ねするようになった。

その後、先生の先生である川本臥風先生に師事するというご縁をいただいた。

次に学生時代の句と今の句と比べてみることにする。

学生時代の句(五句)

梅雨晴や峠の杭のつなぎ牛
どこからか虻なく声や草いきれ
背戸近く畑打つ音の秋めきぬ
秋蝶や蘇鉄にちらと白かりき
青空や軒に百足蟲のまつはれる
いづれも句会で先生に認められた句。

八十八歳の句(十句)

新なる命たまはり明けの春
ほんとうの正月を呼ぶ杵の音
去年よりも下手かと老いの筆始
とべら焚く慣い先祖も聞きをらん
豆まきへ聞うつくしくわが庭に
春寒と書けばやさしき文となり
芽ぐむ木へ語れるごとく雨の音
白椿咲く浄きかげみな宿し
泰山木のおとこ好み百千鳥
春日負ひふれあい広場へ集ふ老い
第一句目の「新なる命……」の句は、もうちよつとで命を失うところ、八幡浜市立病院の内科の先生、県中央病院の心臓血管外科の先生の連携で、一命をとりとめていただいたその感動を詠んだものであるが、それには、多くの先生方、看護師さん、家族、友人のお蔭もあつたことは勿論である。
ところで、八十八歳と歳を重ねたものの、学生時代と比べて、あまり上達していないような気がする。殊に、学生時代の第一句目の「梅雨晴や……」のような句であ

る。もちろん、年齢的なものもある。ので、一概に評することはできないことではある。ただ、学生時代もその後今日までも、俳句が大きな支えとなつて生かされて来たことは共通である。実益には縁遠い趣味のようなものが、大きな生きる力となつていることの不思議を改めて思う。
とにかくこれからは、多くの方々からいただいた新なるこの命の意味あるものにするべく、俳句を心の支えとして、これからの人生を歩みつづけていきたい。

(昭和一八卒) 宇和郡伊方町井野浦 八五)

短歌

「感動」を新たに



印南 秀克 (昭二三青師卒)

青鷲が小首をかしげ立つ川に
降りいでて細しこの春の雨
兵の日の消灯ラッパ鳴る寒夜
母の手紙を幾たびも読む

国破れむなしく還りしふるさとの
駅にカンナの赤々と燃ゆ
練兵場匍匐せし日の城北に
キャンパス建ちて夏日に光る
(愛媛大)

潮騒のとどく岬の岩影に

石路のひとむらひえびえと咲く
教員をしつつ夜学の大学を
卒へし日思ふ雪の積みあらし

学校の裏の小径を行くときに

コーラス聞こゆなつかしきかな
朝ごとに蝉のなきがら転びあて
紅ひそかなり萩の花咲く

卒業の子らとの別れ淋しきに

帰る夜道にふくろふ啼きし
遠き日に小鮒を共にすくひたる
弟逝きぬさくら花散る

原爆忌月の光に照らされて

あはれのうぜんの花溢れ咲く
くも膜下術後の妻の白髪を
馴れぬ手付きのわがが染めやる

術後妻つまづきつつも弾く琴は
春先ぶれかししみと聞く

佐田岬サシバ南へ群れ渡る

朝の空をしろがねに光り
臥すわれに南天高くオリオンの
ベルト耀りつつ白々と燃ゆ

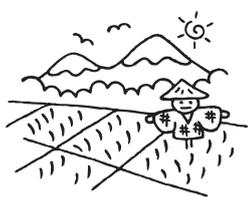
遥かなる刈田のはてに山眠る

ふるさとの山父母の山
秋あかね川面に群れて羽根ひろげ
夕つひかりの中を去りゆく

デイケアの一人二人と車降り
コスモスの道手を振り帰る
浜唄の「浜子トンボも盆かぎり」
塩田あとの空の秋雲
石鎚の真白き雪のかがよひて
凍てし漁港を小舟出でゆく
——*——*

青師時代は「葉校の中の無数の空さわぐ」の名句を残された篠原梵教授より国文学史の授業を受け乍ら、私は教職で理系を担当し、せつかくの「師の志」を継ぐことも出来ず時を過ごしてしまいました。退職後介護の日々を過ごすち、やっと俳句や短歌を新聞に投稿し、今は熱心な選者の先生方に励まされ、作句、歌詠みの毎日となりました。短歌は感動であり、生きる喜び哀しみを心赴くまに詠み続け、平凡におちいらぬよう、いつまでも「感動」を新たに頑張りたいと思っています。

(昭和一八卒) 新居浜市垣生 一一六一二二





今、教育に思うこと

明治・大正の頃の教育事情(三)



上甲 修
(昭二九卒)

松山市の旧中島町に怒和島(ぬわじま)という島がある。この怒和島の出身で大正七年に愛媛女子師範を卒業した原田重代(旧姓中田)先生は、母校の百周年を記念して発刊された「怒和小学校百年の歩み」に次のような回顧録を寄せられている。

母校に奉職して

原田 重代

創立百周年！卒業生の皆さん、おめでとうございます。私は退職して四十年余、七十七歳になりました。故郷を離れ松山に居住して十三年、静かにまぶたを閉じると自分の教員時代が、この間のように浮かんで参ります。怒和小学校には十六年間勤めました。当時は教育にたいする理解が非

常に低く、親は忙しいからと言って、子供を休ませて子守や手伝いをさせていたのです。だから出席率は郡内で最下位に近く、そのため生徒の成績も悪いので、幼い妹や弟達を連れて登校してもよいことにしたところ、まるで学校が保育所のような状態になった時代もありました。

生徒の学業成績を何とかして向上させようと、各学年別とクラス毎の成績を棒グラフにして出し、生徒の競争心をあおったりしました。保護者との懇談会には、母親が幼い子供を連れて来るので、教師との話しなごろくに出来ない有様でした。宿題を出してもやってくる生徒は少なく、一年生でも教師の言うことは聞かず、特に女の先生を軽視していました。

教室で席順を決めても着席せず、先生は学習に入るより、先ず言う事を聞かすのに苦労しました。だから鬼の先生にならざるを得なかったのです。

「耳はないのか。」と叱つたら「耳は二つある。」と言い返した子が、今では立派に成功しておられる事を風の頼りに聞き、心なごむ思いがします。……

愛媛県師範学校の沿革

愛媛県師範学校は、新しい時代の要求に即応する教員を養成するためにつくられた。

明治九年九月

松山市二番町に新校舎落成、入学は高等科の卒業生、修業年限四年

明治二十三年十一月

木屋町に移転

明治四十一年四月

本科第二部設立旧制中学校の卒業生受け入れ開始、修業年限一年本科第一部は高等科から入った者

明治四十三年四月

女子部を分離、温泉郡三津浜町に愛媛県女子師範学校を設置

昭和の初め、本科一部の修業年限を五年、二部を二年に延長、更に十数年後、一部は六年、二部は三年に延長。戦後の学生改革で愛媛大学の教育学部となる。

教員不足時代

小学校の教員不足は、明治の初めから昭和三十年代まで、実に九十年以上も続いた。

明治二十八年、夏目漱石が愛媛県立伊予尋常中学校(後の松山中学)に赴任した時、県内の上級学校は、松山に旧制の中学校二校と女学校が二校、それと師範学校のみならず五校しかなかった。

明治三十年代に入り、松山以外の地域に少しずつ旧制の中学校が増えはじめ、明治の終りから大正時代にかけて県内各地に実業学校や女学校が増えていった。

明治の頃の小学校教員は、僧侶・神官・牧師・医師・士族が多かったという。しかし教員が足りないので郡ごとに教員養成所をつくり、増やしていった。それでもまだ足りないので上級学校を出た人を代用教員(補助教員)として採用し、その人達が大きな役割を果たした。代用教員の数は、野口学著『昭和前期初等教育の実相とその考察』によると昭和二年三月の時点で愛媛県小学校教員総数四千二百二十人のうち六百七十五人が代用教員で、特に南予地域では代用教員の数が教員総数の三分の一を占めたという。

全国の小学校教員数、男女別・資格別表

年 度	教 員 総 数			女子教員の 比率 パーセント	資 格・職 名		
	計	男	女		訓 導 正教員	准訓導 准教員	補助教員 代用教員
大正 4	162,992	117,182	45,810	28.1	125,087	15,629	22,276
9	185,348	125,050	60,298	32.5	142,010	16,639	26,699
14	209,894	140,531	69,363	33.0	168,718	15,192	25,984
昭和 5	234,799	159,589	75,210	32.0	208,262	8,801	17,736
10	257,691	176,959	80,732	31.3	229,570	5,494	22,627
15	287,368	172,608	114,760	39.3	241,875	7,695	37,398
20	310,281	141,878	168,403	54.3			

大正四年から昭和二十年までの全国の小学校教員、男女別、資格別の推移は左の表の通りである。

少子化と 学校統廃合に思う



小野植元幸
(昭二九卒)

同窓会報「第一〇八号」にて

「少子化と教育諸問題に思う」に掲載されたが、再度「少子化」が教育に及ぼす影響について考えてみたい。平成二十二年度も県下の小・中学校約十校が統廃合した。一九九二年から二〇一〇年度に、全国で五七九六校が統廃合。県内でも各市町・久万高原町・伊方町・大洲市・四国中央市・宇和島市・西予市・松山市等が統廃合を計画している。県下でも一九九二年から二〇〇九年度までに小学校五八校、中学校三〇校、高校十五校計一〇三校減少。

県教委は「統廃合は住民や子どもたちの声を聞き、話し合いで進めるべきだ。」とし、判断は市町に委ねていると理事者側は発言している。

統廃合は「少子化」が原因で、若者の働く場所がなく街へ街へと流失。その上に晩婚化。「安心、

安全」の生活を守る消防団も高齢者が年々増加。若年者減少で婦人消防団を結成し、団員確保もままならないという。過疎化し、限界集落が年々増加している現状である。

統廃合は、一、地域がさびれる。二、通学距離が遠くなる。三、教職員の採用が少なくなる等。

メリットとしては、一、複式学級の解消。二、集団活動ができる。三、免許のない教科指導の解消。四、友人が増加し切磋琢磨できる。五、市町財政の効率化。六、校舎の老朽化、耐震度の強化。

通学児のいない家庭、主に高齢者に統廃合に反対が多いが、通学児の保護者は「子ども中心」に、子どもが伸びないと言ひ、統廃合もやむをえないと前向きにとらえている。私の母校も廃校になったが保護者は「子供が喜び統廃合してよかった。」の声を聞いた。

教職員採用も少なくなり、県内試験が狭き門となっているため、地元志向だが県外に目を転じる動きも出ている。地元から優秀な人材が流出する恐れもあるが、二〇〇五年から二〇〇七年は退職が少なく倍率約十五倍。採用百十名程度だったが、二〇〇八年から倍率七・七倍。採用も二百二十名

から二百三十名程度に増加。愛大は、平成二十一年度四四・三%から二十二年度四七・六%増となりよるこぼしいことである。特技や資格を持つている者は、加点され有利である。臨採を何年もやって採用される人が多いようである。

現職の教員にも統廃合は厳しい。教員の年齢構成は、四十一歳から五十二歳が全体の約半数、管理職登用が減少。約三十年前も同じ減少で、力量がありながら同世代の人が多くなれない人があった。

本年度より新学習指導要領の全面实施。「脱ゆとり教育」を目指し、指導内容の増加。

五、六年生に英語が週一時間必修となり、現場は、尚一層の研究が必要である。「生きる力」の育成に力を入れ、知識の活用や言語力の習得に力を置いている。東大大学院教授姜尚中は「今の大学は、教弟関係が希薄になっている。学びたいから先生の門をたたいた。」のでは……。

☎ 791-3351 喜多郡内子町五百木 一五四

放送大学十月入学生募集のお知らせ

放送大学では、平成二十三年十月入学生を募集中です。

放送大学は、テレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では、心理学・福祉・文学など、幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々は、次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○ 放送大学の大学院を利用して、**専修免許状**の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、**特別支援学校教諭免許状**の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、**司書教諭資格**の取得が

可能です。

○ 放送大学の講習を受講して、**教員免許更新**が可能です。

資料を無料でさし上げておきます。お気軽に、**愛媛県学習センター**にご請求下さい。



放送大学

知識が人生を変えていく
一科目からでも学べます

平成22年度10月入学生募集中!
(平成22年8月31日まで)

愛媛学習センター
(愛媛大学内)
TEL 089-923-8544

同期会

昭和二十八年

入学生同期会

二年課程

・四年課程合同



増元 晶尚 (昭三三卒)

日時 平成二十三年四月三日

十二時三十分

場所 エスポワール文教会館

参加者 七十名

一、第七回同期会・松山大会

司会進行 藤川 典子

(一) 黙祷(物故者六十七名)

(二) 開会挨拶 三好 優

(三) 県外出席者(七名) 紹介

(四) 学歌斉唱 八木 雅子

(五) 乾杯 森 良輔

(六) 同窓会案内 山下 雅司

(七) 閉会挨拶 永田 明弘

二、三好優世話人代表のことば(抜粋)

朋あり遠方より来たる、亦た楽

しからずや。

皆さん、よくいらっしやいま

した。大いに飲み、ご歓談を。カラ

オケは自粛します。ご理解を。

※ 教育文化賞受賞者

藤川 典子さんに拍手



三好世話人代表挨拶

三、心と心つながる仲間
各テーブル七名、十のテーブル
に別れ、輪になって座る。
まずは、ビールで乾杯。
お酒がまわると、あちらでもこ

ちらでも笑顔、歓談の声。同期会
ならではのいい風景である。
「同期会はいいものですね。喜寿
を迎える年になっても、会えばす
ぐに学生時代に帰り元気が出るの



北海道の首藤美津子さんを囲んで

ですから……。」と山本さん。
同期会は、見えない情で堅く結
ばれた人と人、心と心つながり
である。この見えない情で結ばれ
た絆を、これからもずっと大切に
していきたいと強く思う。

四、元気をもらった近況報告
宇都宮さんから、「週一回公民
館での料理教室の講師として、
若い母親に教えて四年になりま
す。また、市の健康づくりの会の
ウォーキングにも出かけて楽しん
でいます。その他、エアロ、将棋
などあれこれ忙しく退屈してい
る暇はありません。」
森さんからは、「現在環境イベ
ント『上林を考える会』に参画し、
イベントづくりを力を入れていま
す。

中国の諺、『人ノ老イルヲ怕レ
ズ、只、心の老イルヲ怕レル』を
日々の心として、明るく元気に活
動しています。」と。(以下省略)
定年後、過去を懐かしむだけの



酒よし料理よし、楽しき語らい

人生はさびしすぎる。本当に大事
なのは、定年後も人間として輝き
ながら生きていくことだと思
う。よく周囲を見渡せば、自分にも
やれることはいくらでもある。
毎朝の道路掃除とか、毎晩の食
器洗いなど、自分の周りに少し
づつ活動できることを見つけてい
くこと、そういう気持ちが大
事だと思
う。



歌の力で東日本に元気を！

五、届け東北の空へ、歌の力
村上庄次郎さんの名司会で、余
興が始まる。郷土芸能、詩吟、手
品、そして学歌、童謡など……。
「ここらで一っ東北支援の歌を。」
の声。

「それでは、荒城の月を。」
中嶋敬一さんの朗々たるテノール
が会場に響き渡り、やがて東日本
への支援の歌声となつて、大きく
響する。この曲は、忍耐強い宮城
県民の愛唱歌でもある。ちなみに、
「夏の思い出」は、つながりに生
きる福島県民の愛唱歌である。最
後は、粘り強く、真面目な岩手県

民の愛唱歌「北上夜曲」を全員起
立して大合唱。八木雅子さんの指
揮、渡部弥生さんのピアノで、復
興への願いをこめつ、歌いあげ
た。

千年に一度といわれる東日本大
震災。みんな力で出し合い、心
を一つにして、前へ、明日へ進ん
でいかなければならないと思
う。
被災地に届け、七十名の歌の力。
私たちが、今まで当たり前前と
思っていた自然の美しさ、町や村
が平穏で日々平和な暮らしなど、
これらは決して当たり前前なこと
ではなく、本当にありがたいこと
なのだ気づかされた。ここから、
喜びや、悲しみ、寛容さなど人間
らしい感覚が生まれてくるもの
と思
う。

終りに、渡部悦郎さんら四名か
ら、「次回は今治で。」の提案、拍
手で賛同。永田さんの挨拶でお開
きに。

なお、世話人の岡省吾、佐々木
幹男、関健二、橘智恵子、山内志
津江、高橋久枝さんのお骨折に深
く感謝しながら筆を置きたい。
ありがとうございました。



2年後に今治で

八十四歳の 在京同期会



武田 敏文
(昭二卒)

平成二十二年十二月十四日(火)東京都台東区、上野駅の近くの「鮎忠」で、愛媛師範学校昭和二十二年卒業第三十八回在京同期会を行いました。

十二月十四日と言えば忠臣蔵の日、吉良上野介ゆかりの人にとっては涙の日。そのせいか谷口敬さんが案内の日で、これまで雨の日の記憶がないが、当日は時雨の朝。でも午後の帰りのころは止んでいました。

高橋立身さんは「関東愛媛教育会結成五十周年記念誌」にすばらしい文を寄せていただいたので、今日の会の原稿をお願いしたが、白内障のため辞退された。そこで代わりの人をお願いしたがかなえられなかったので私が書くことになりました。

井原茂幸さんが在学中の寮生活と体罰の話を始めると、次々と話が続き、俄然盛り上がりました。水野允陽さんは先日奥様を亡く

されたので、元気が減ったようでした。同じ経験の藤本正義さんに栄養食のコーチを頼もうと思っていました。藤本さんは腰痛がひどくなり欠席したので残念。水野さんも病気で通院したとのこと。久し振りに石水修二さんが出席。石水さんと玉田泰太郎さんの奥様の龍子さんと東京都新宿区で隣の学校に勤めていたことが分かり、アルコールのピッチが上がっていました。

石水さんは愛媛師範の頃、谷口さんと同じ体操部に入っていて、運動会の時の鉄棒の演技を思い出して楽しそうに話してくれました。

玉田さんは夫の泰太郎さんが生前愛媛の菊間の実家の草取りなどに月の半分行っていたのを受け継いで、同じように愛媛に行っているそうです。谷口さん以外、愛媛に疎遠になりがちの僕たちに敬服されました。今日は女性が一人ということ、二つの鍋を行き来しながら僕達の調理のお世話になりました。

山之内登さんは体調の悪いところ遅れて参加してくれましたが、帰りも早く退出しました。ところが上野駅まで帰って、足元の靴がどうも違うらしいと気付き、わざ

わざ会場まで引き返して来ました。愛媛県人の典型のような彼の行動に会場の人達も感心していました。

午後二時、谷口さんのカメラで記念写真を撮っていただき、「また来年元気で集まろう。」と話合せて家路につきました。

わずかのアルコールに腹も満腹。昼食の献立の予定の鰻はお土産にもらって……。

331-0063 さいたま市西区プラザ
八一一四



愛媛大学校友会 結婚支援事業

財団法人白楊会館が「白楊会館結婚相談所」として活動していましたが結婚相談事業が愛媛大学校友会に引き継がれ、平成23年度から、会員交流事業の一つとして、「愛媛大学校友会結婚支援事業」を実施することになり、平成二十三年五月に、その事業を実施するため、愛媛大学校友会は「えひめ結婚支援センター」の協賛企業(団体)として登録しました。

校友会結婚支援事業の当面の主たる事業内容は、えひめ結婚支援センターの目的や事業内容を周知するとともに、「校友会結婚支援事業会員」としての登録とえひめ結婚支援センターへのメールマガジン登録(無料)を案内し、校友会結婚支援事業会員にイベント情報等をお知らせすることになります。

校友会結婚支援事業会員への登録手続きなどの事業の詳細については愛媛大学校友会のホームページをご覧ください。トップページの左下に「結婚支援事業」のバナーがあります。

【愛媛大学校友会ホームページ】
<http://koyu.ehime-u.jp>

新設 愛媛大学校友会館の利用を

この会館は、愛媛大学校友会の活動拠点として使用するとともに、校友会会員、愛大職員、学生及び学外者が交流できる場を提供することを目的としています。

会館を利用することができる者としては、

- ・ 本学の卒業生及び修了生
- ・ 本学を退職した職員
- ・ 本学の職員及び学生
- ・ その他管理者(経営企画部長)が適当と認めた者

利用できる室は、

- ・ 交流スペース
- ・ サロン
- ・ ミーティングルーム
- ・ 白楊の間

開館を利用出来る日時は、

原則として、土、日曜日、国民の祝日に関する法律に規定する休日及び十二月二十八日から翌一月四日までの間を除く日の八時三十分から十七時までになっています。ただし、管理者が必要と認めた場合は、この限りではないとのことです。

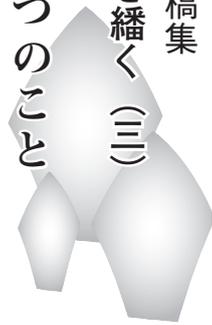


先輩を偲ぶ

林傳次先生遺稿集

「把翠」を繙く(三)

二つのこと



その一 疑問を掘りさげよ

橋本進吉博士の上代特殊仮名遣の発見(キ・ケ・コ・ソ・ト・ノ・ヒ・ヘ・ミ・メ・モ・ヨ・ロの十三の音を表す万葉仮名には、それぞれに二つのグループがあつて決して混同されることがない。したがつて上代にはこれらの音にそれぞれ二通りの音があつたに相違ないという研究)は、博士以前の上代語研究と博士以後の上代語研究とを、截然と二つに分ける劃期的発見であつて、これが万葉集本文の校定・訓のつけ方・語の解釈等に大きな貢献をしたことは、いまさういうまでもないところである。

しかしこの発見も、最初からこういう結果を得ることを予見されたものではなく、世の多くの発見発明と同じように、小さな一つの疑問を根気よく掘りさげて行かれた結果、遂に右の結果に到達されたものである。すなわち博士の著作集第三「文字及び仮名遣の研究」

の解説に引用してある博士自身の未定稿によれば、万葉集巻十四東歌の中に、辞「が」にあたるべきところに「家」の字を書いたものが少くないのに疑問をいだき、之を解決する一つの方法として、万葉集の「家」の仮名すべてについて調査せられたのが、その端緒だったという。

○

山田孝雄博士は現代における理論文法の権威であるが、博士が文法研究を志された動機もまたほんの小さなことで、単なる一中学生の質問にすぎなかつたのである。その間の事情を博士自身の語られているところなきこう。

「丹波篠山の鳳鳴義塾で国語の教師をしてゐた。当時学校できめられてゐた文法教科書(関根正直氏の普通国語学)で、主格を示す助詞として「の」「が」「は」の三つをあげたところをそのまゝ、受売的に講義してゐた。ところが一人

の生徒が立つて質問しつゝ、自分の用ゐてゐる「は」といふ助詞は主格以外のものをも示してゐるといつて、いろいろ例をあげて質問した。……即答は出来なかつた。

……さて考ふれば考ふるほど、生徒のいふことが正しく教科書が正しくないことが明になつたので、次の授業には生徒にあやまつたのである。而して当時の大学生の国語学といふものが中学二年生よりも劣つてゐるといふことを考へて見たときに、我が国語の学問の貧弱さに悲しくもあり腹立たしくもあつた。……(日本文法学要論)

かくて博士の研究が始まつた。博士の国学者的情熱と多年に亘る博士一流の精緻細密な徹底した研究とによつて、遂にあの大著「日本文法論」が生れたのである。

その二 老の至るを知らず

葛飾北斎は宝暦十年(一七六〇)に生れ、十九才のとき勝川春章の門に入つてから、画作に従うこと前後七十年、浮世絵の類麿期にありながらかつてみなかつた芸術的風格をもつ風景画を描いた人であるが、七十三才の時、つぎのような述懐をもらしている。

「己れ六才より物の形状を写す癖ありて、半白の頃より画図を顕すと雖も、七十年画く所は実に取るに足るものなし、七十三才にして稍々禽獸虫魚の骨格、草木の出生を悟り得たり。故に八十才に

して益々進み、九十才にして猶ほ其奥意を極め、一百才にして正に神妙ならんか、百有十才にしては一点一格にして生くるが如くならん」

これが単なる放言でなかつたことは、弟子の一人が画技の未熟なるを嘆いて画業を捨てようとしたとき、北斎の娘阿栄のいつた次の言葉で明かである。

「我父は幼年より八十有余に至るまで日々筆を取らざる事なし。然るにすぐる日、猶腕を組み、余は実に猫一疋を描くこと能はずとて落涙し、自ら其画の意の如くならざるを嘆息せり云々」

八十才を越えてなお画道に精進をつづけた彼の態度には肅然として襟を正さしめるものがあるではないか。

○

井上通泰博士の「万葉集雑考」は、博士が万葉集の全巻について註釈された「万葉集新考」の補訂とも見なすべきもので、その殆んど全部は「万葉雑話」として昭和二年秋からアララギに掲載されたものである。昭和十六年九月号にはその第百四十回が載つたのであるが、その文の終に「昭和十六年七月三十一日稿、鉛筆を措きし後試に体温を検するに三十八度八分なり、但し感冒の為なるべし。」と註してあつたという。

博士は慶応二年生れであるか

ら、われわれ後進に深い感動を与えずには措かない。しかも博士はこの昭和十六年になくなられたのである。今手許にその月日を知る資料がないのはつきりしたことでは言えないが、この時の病気がやがて博士の命取りになつたのではないかと思ふ。

○

事例をあげたのみで予定の枚数を超過してしまつた。なまかな感想をつけ加えることは、かえつて蛇足であろう。学問の道も、教育の道も、それから人の世のことまことに深遠である。折に触れ時に応じて、これら先進の生き方を想起してもらえばそれで十分である。(昭和二十九年三月発行埼玉大学国語研究会誌所載)

祝・叙勲

(平成二十三年六月十八日)

☆瑞宝双光章

教育功勞 井上傳一郎 殿

八幡浜市松柏甲七九〇―二 昭三十八年卒

教育功勞 福井 壽泰 殿

松山市余戸西六一八―二三 昭三十八年卒

教育功勞 横手 道明 殿

西予市宇和町田苗真土一五七四 昭三十八年卒

教育功勞 横手 道明 殿

西予市宇和町田苗真土一五七四 昭三十八年卒

学部トピックス

教育学部生が第40回記念「日彫展」において
新人賞を受賞



新人賞受賞作品「想う」



受賞者 石井さん

教育学部芸術文化課程造形芸術コース4年生石井沙知さんが、「想う」で新人賞を受賞しました。

「日彫展」は、昭和22年「日本彫刻家連盟」として朝倉文夫・北村西望らを中心として発足した美術団体「日本彫刻会」が、作家精神の発表の場として会の活動の主軸と位置づけ運営されている展覧会です。

当展覧会は、公募展として美術、文化の活性化を図るために毎年開催されており、第40回記念日彫展は、平成22年6月23日～7月5日まで国立新美術館で開催され、その後、地方展として第40回日彫東海展(平成22年7月7日～7月11日)・第40回日彫北陸展(平成22年7月14日～7月19日)を巡回しました。

石井さんは1年生時に木彫のトルソで入選しており、今回2回目の挑戦です。この受賞は今後の制作活動に対する大きな励みとなり、継続して出品したいと話しています。

教育学部の牛山眞貴子教授が
第5回教育文化奨励賞を受賞

平成23年3月14日(月)、教育や文化、社会福祉の分野で活躍する個人や団体をたたえる「第5回教育文化・社会福祉奨励賞」(関奉仕財団主催)の贈呈式が松山市内で行われ、教育学部の牛山教授が、「第5回教育文化奨励賞」を受賞しました。

牛山教授は、身体表現を通して人間の幸福に貢献できる活動を続けており、それが芸術としてのダンス、及びコミュニティダンスですが、さらに進めて、障がいの有る無しにかかわらず共創をテーマに車椅子ダンスの研究を行っております。

牛山教授は、愛媛県車椅子ダンスサークルの代表を務めており、2009年には、作品指導、制作、コーディネートを手がけた「みんなのダンスパフォーマンスFUKUBUKURO～福袋～」が明治安田生命社会貢献事業に採択され、エイブルアート・オンステージ東京公演に選出されました。これがきっかけとなり、上海万博の「共同の万博・共同の歓楽」に日本代表として愛媛大学ダンス部所属の学生と車椅子ダンサーが参加し、障がい者の芸術による国際交流の実現に貢献しました。

今後の活動について、地道にそして丁寧にコミュニケーションを取りながら、アートで人と人を結んでいきたいと牛山教授は抱負を語っていました。



受賞者 牛山眞貴子教授



ダンス指導風景

教育学部生が研究奨励懸賞論文において
最優秀賞を受賞

平成23年1月27日に、教育学部教員養成課程4年生の谷村晴香さんが、協同出版(公益信託 小貫英 教育学研究助成記念基金)が募集した懸賞論文「教師になるには、子どもとどう向き合えばいいか」で、最優秀論文に選ばれました。論文には、地域連携実習などのボランティア活動が、自分の教育観を構築することに役立ったことが記述されています。

【受賞者の谷村さんのコメント】

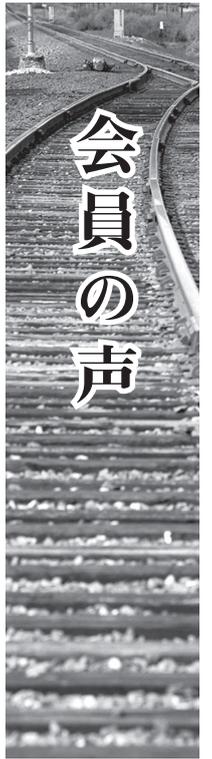
「機会を逃さず積極的に挑戦する!」というのが私のモットーです。懸賞論文募集のポスターを見た瞬間、大学生生活4年間の集大成として、挑戦してみようと思いました。最優秀賞受賞を目標に応募はしましたが、本当に最優秀賞をいただけることがわかった時はとても驚きました。今回、この論文を書くにあたり、今までの自分を振り返り、また、今の自分としっかり向き合うことができました。今の私があるのは、これまでかかわってくださった皆様のおかげです。大学生になると、活動範囲を広げることが可能で、自由が増えました。その中で、たくさんの人とどんどんつながっていくことで様々な経験をさせていただくことができ、自分の成長につなげることができたということ強く感じます。すべての人に感謝の気持ちでいっぱいです。いよいよ4月から私も小学校教師です。初心を忘れず、子どもたちのために全力を尽くし、子どもたちと共に成長していきたいと思っています。



受賞者 谷村晴香さん



3年生時にフィリピンの小学校で授業実践



会員の声

附属小学校の思い出(一)

愛媛師範学校教官

栗田国彦先生のご長男



栗田 瑞夫

私は今では置き去りになってい
るであろう戦前の愛媛県民歌「石
鎚の嶺 巖として……」の作曲者
である、旧愛媛師範学校教諭栗田
国彦の長男です。

附属小学校には、紀元二千六百
年として国中が湧き返った昭和
十五年に入学、父が十九年郷里静
岡師範に転任（私は五年二学期）
する迄、いわば小学生の大半の時
期にお世話になりました。

戦時色に包まれた時代でしたが
伸び伸びとした雰囲気、喜寿を
超えた今日でも、当時の様子は
鮮明に覚えており懐かしき限りで
す。

往時の附属生活の一断面でも偲
んで頂ければとの思いから、印象
的であった事、それも先生の教え

を中心に綴ってみました。幾許の
価値あるものか、単に貴重な紙面
を汚すに過ぎないとの忸怩たる思
いが強い一方、その時代を偲び何
かでも感じて頂ければ望外の幸せ
です。

ピカピカの一年生として入った
附属。入学前の記憶としては、簡
単なテストの如きものを受けた事
と、在校生の学芸会を父兄同伴で
見学した事くらいである。

クラスは男女混合組で、松組竹
組とあり、私は松組、受持は清水
澄夫先生、竹組は吉金一郎先生で
あった。因みに主事先生と呼んだ
校長は恰幅の良い今井先生で、本
校と称した師範学校兼務、間もな
く仲田備幸先生に代られた。

その後転任して来られた方々も
含めて思い出すま、に先生方の名
を記すと（敬称略）山本福松、伊
台実、松末通信、宇都宮勝、西村
広海、渡部徹、仙波、玉井、渡辺
（剣道）、田名後（体操）、阿部（工
作）、大野利喜太、山本隆闊といっ
た方々がおられた様に思う。

それに女教師で音楽担当の高須

賀先生、袴を着装しておられた時
もあったか。間もなく高島茂久先
生に代られたが。カラン／＼と時
間を告げる鐘を鳴らしていた用務
員の皆さんの姿も目に浮ぶ。

三年生で守谷義一、五年生で富
永徹先生と受持が変わったが、振
返ってなんと素晴らしい先生の教え
を受けた事か、感謝の気持ち一杯
である。共通していえる事は（教
えを受けた分際で敢えてお許しを
頂き）まずどの先生も教育に大変
な情熱を持っておられ、生徒の身
にもヒシ／＼と伝わってくるもの
が感じられた。加えて生徒に対す
る愛情に満ちた先生方であられた
事。後年平々凡々の会社員生活を
送った私であるが、情熱と生徒愛
に勝る大切なものなし、というの
が教育についての思いである。

家が道後であったので、市電に
乗り通学、之が何とも楽しかった。
運転席の脇に立ち進行方向を往復
眺めて通う程に自ずと顔馴染の運
転手さんも出来、厚意であちこち
乗り廻させて貰った事もある。

道後は比較的知的職業の親を持
つ家庭が多く、入学すると早速「道
後のお坊ちゃん方」と一部の級友
から揶揄を受けた。軽いイジメと
いった処か。之位は仕方ない。

通学路については、三年生から
電車禁止、徒歩通となった。距離
の負担は感じなかったが、悩ま

れたのが途上で、湯築、東雲、清
水といった他校の生徒の団に出
会うと良く「おどれは附属のタン
キューか」と悪態をつき、つかみ
かかって来られた事。タンキユウ
とはどこから出来た言葉なのか。

さて一年が終了した時、清水先
生は私を物陰に呼び「君は勉強で
は優等賞を上げたかったが、残念
な事に健康が伴っていない。一
事実三学期は風邪をこじらせ全休
に近かったー両方揃ったら申
し分ない優等賞を上げるのだが」
と思っても依らぬ慰めと激励を頂い
た。私は別に賞を貰わなくても気
にしていなかったが、そこ迄気
遣って下さった事が今となって有
難くてならない。追記をすれば当
時の通信簿は甲乙丙、間もなく優
良可という評価に変わったが、父兄
に宛てた簡単な寸評ともいえるべき
通信欄があり、それには「明朗に
して覇気あり 話早合点」とあっ
たように記憶している。生徒を観
ること師に如かず、未だに矯正出
来ない欠点を鋭く見抜かれた炯眼
には只々恐れ入るのみである。

序でもう一つ。運動場の隅に
あった砂場でM君と相撲をとって
遊んでいた時の事、私が柄にもな
く強豪M君を一寸手荒に投げ倒し
たら恨めしそうに「先生、栗田君
は相撲の手を知らんです」とア
ピールした。之はお目玉頂戴かと

覚悟したら先生は「何を言う。君
がどれだけ相撲の手を知っている
のか。生意気言わずに楽しくやれ」
と、アベコベにM君の方が叱られ
た。子供心に私は「之はいささか
エコヒイキして下さったか」との
思い半分であった。

一体全体、先生という職はか、
る日常茶飯事的な揉め事ーと
いうにも当たらない些細な事ーに
日々直面するケースが多いのであ
ろうが、その時何気なく発する一
語でも六十数年経た今日迄覚えて
いる事もあると考えると、空恐ろ
しくなるような厳しい立場に在る
大変なものをつくづく思わされ
る。

二年生の十二月、突如大東亜戦
争に突入、真珠湾攻撃から始る戦
捷ムードに、無邪気に痛快な気分
に浸っていたが、学校でも次第に
戦時色が増して来た。

三年になり守谷義一先生が担任
となられ、学級もそれぞれ男女組
と再編成された。守谷先生は新進
気鋭、気合も凄しく、勢い余って
ビンタを喰うこともあった。然し
生徒を可愛いがる事も一入で、あ
る時、道後近郊の同級生数人をひ
き連れて公園でお月見と洒落こん
だ事もあった。その時頂いた梨の
丸嚙りの甘さは格別であった。
戦時中とあって体力増強が叫ば
れ種々トレーニングが実行され

た。その一つは寒稽古。早朝霜を踏んで学校に集合、掛け声諸共に城山の下を一周するというもの。確か一週間位続けられたと思う。もう一つは、強歩訓練と称して、暑い盛りに予讃線沿いに北条或いは浅海迄歩き帰校する仲々キツイものであった。途中道端の民家のおばさんが熱いお茶を振る舞ってくれた事、守谷先生がゴール間近でラムネを全員に飲ませて下さり生き返った思いだった事が懐かしい。

途中の脱落者は列車で帰り、最後迄頑張つて学校へ辿り着き、先生の音頭で「完遂した勇士万歳」と叫んだ時は、弱かった体に少し自信が付き、漠然とした思い乍ら将来は海軍兵学校へ等考えた。

ところで当時流行した学校での遊びといえば、ゴムマリで三角ベースの野球の真似事と、独特のルールによるケンケン遊びで、こちらの方が面白かった。ローセキでグラウンドに陣地を書き込み敵味方に別れて、自陣外ではケンケン(片足跳び)で勝負する単純な遊びであるが、私は結構相手をヒックリ返すのが得意で甚だ楽しく、休みの終りを告げる鐘が恨めしかったものである。

もう一つ、相撲力士の名刺大のブロマイドを集める事に興味を持ち、級友と休みの時間にジャンケ

ンで(シーヤンエイといった)勝負に依じて一枚づつ取つたり取られたりするのであるが、或る時大勢で二人づつ競っている処を守谷先生に見付かり、当然乍ら叱られた。曰く「双葉山―当時全盛時代の横綱―の写真を眺めてこの様に強くなりたいと願うなら良いがジャンケンでやりとりするなどで以つての外」という次第。然し先生が去るとたちまち「その双葉山の写真が無いから欲しいんぢや。シーヤンエイ」と性懲りもなく挑んできた級友がいて閉口した覚えがある。所詮、子供とはそんなものかもしれないが。

忘れられないのは、戦争相手の中国に王兆銘を主班とする分派親日政権が出来、友好の証しか、数名が、上級クラスに留学生として派遣されてきた事。彼等が話す片言に近い日本語で珍し半分会話を交したのを記憶している。名前はどういう字か判らぬが、ボクカー ラー ヒョウウ カク リー

タンという人達だったか。或る時、学芸会でこの人達が中国語で合唱を披露してくれたが、もちろん誰も理解出来なかつた。然しその中に繰り返されたチンツルシヨネアー チンツルシヨネアー というフレーズが印象的で、たちまち我々は半ば冗談めて之を口ずさんだものである。この意味は永

年疑問であつたが、最近フトした事から或る中国人から、当時の状況から推して「近代的少年啊」ではないかと教えられた。「現代の若人よ元氣出せ」といった意味になるらしい。成程と氷解したがそれにしても、あの人は戦後どんな運命を辿つたのであろうか。

ここで、学校と家庭をつなぐ小冊子「渾一」に触れておきたい。この冊子は確か冒頭に父兄の有識者、続いて諸先生のエッセイ、更に各学年生徒の作文と続く、今思えば非常に濃い内容のものであつた。自分の綴方が、たまたま一年生の時に掲載されて嬉しくて手に取り、以来学年が上るにつれ先生の文も拝読する様になつた。

渡部(剣道)先生の書かれた「授業は先生と生徒の真剣勝負の場であり、授業終了の鐘は双方引き分けを告げるもの」との文が今でも頭に残っている。

そういえば巻頭文に級友N君の父君が「息子が友人と遊んでいる時、自分の体は自分の体であつて尚自分の体でない―当時は天皇の赤子という言葉があつた―だから忠節を盡す意味からも大切に怪我などせぬ様注意せねばと言っているのを耳にして、ハットして感動した」と書かれた事があつた。教育の影響恐るべしと別の感想を持ったのは大分後になつてからであるが。

あるが。

「先生の先生」にも言及しておかなければならない。師範学校卒業を前にした生徒諸氏がいわゆる教育実習として附属の諸クラスに配属、何か月かの間、教室の後方に席をとり、担任の先生の授業を見学勉強、時には自ら教壇に立ち実地授業を行うもの。短い期間であつたが、姓が記憶に残っている方々は、田坂、富吉、森、久野諸先生。先生というより兄貴分にも思え、種々会話を交した記憶がある。そういえば久野先生だつたが、国語の授業をされた後、守谷先生が論評を加えておられる言葉をたまたま耳にした。内容は「君はここでこういう質問を生徒に浴せたが之は愚問だね。ハッハッハッ」こういう指導を受けつ、一人前の先生になつていくものかと生意気な感想を持ったものである。序ながら父が師範に奉職していたので自然にその周辺の生徒諸氏のお名前も頭に入った。一色章範、一宮三郎、井手野義雄、川端さん、古川さん、井手さんといった方々である。お元氣な方もおられようか。

(次号へ)



会報の送料納付について

平成二十二年七月号でもお知らせしましたように、会報の個人宛発送は、送料を各自で負担していただくことになつております。

出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方お願い申し上げます。

記

①一年間五〇〇円で、二年間分ずつ収めるようになっていきます。

②二年ごとの更新は、煩さなので、何年間かを、まとめられる方もあります。

納付期限 毎年三月三十日までと

し、二年毎に更新する。

送金方法 郵便為替・現金書留・郵便振替で

振替口座番号 ○一六四〇一七二七五四

送り先 松山市文京町三

愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもつて、かえさせていただきます。

【今を生きる】

生かされて生きる

急性心筋梗塞症からの
生還

菅田 顕

(昭三四卒)

私の命と対峙し、慈愛に満ち優しさに包まれた「大勢の県立中央病院のドクターをはじめ微笑みを失わず献身的に世話して下さい」全ての看護師の皆様様に心よりこの文を捧げたい。」

四月三日(日)九時半頃だった。夕食も終え一家団欒で娯楽TVを見ていた頃だった。私の身体が何故か急変した。何故か生汗が出て来だし、気が遠ざかるような気持ちになった。直ぐ傍らのフロアーに横になり、症状の回復を待ったが戻らない。家内に「私の部屋で少し横になるから」と告げて立ち上がったままでは記憶している。家内の甲高い「おとうさん大丈夫大丈夫」の声にはっと我に返った。「どうしたんだ。」と言いなながら私が嘔吐した中にあることをとっさに理解した。茶の間に這って、すぐ家内に命じた「早く救急車を呼んでくれ。」と。その朦朧とする中で、家内のそして女性特有の肝の据わった処理に驚きを感じていた。たまたま近くに住んでいた次男とも連絡が取れたようで、早

速我が家に駆けつけてくれ、母に指示をしながら的確に、迅速に行動して下さいた救急隊の方々とも明確に質問に答えていた。

現状を迅速に判断してか、今日の救急指定病院である「野本記念病院」に向かった。

病院に到着するやいなや、てきぱきとした救急隊員の現状報告を聴きながらレントゲン撮影、採血、必要な処理をされて私に報告したのは「心筋梗塞」にまちがいはありません。諸般の事情から、近くの県立病院に連絡を取ります。確かな処置をしていただきますので、よろしいですか。」と力強くおっしゃった。「ご迷惑をおかけいたしますがどうかお任せ致します。」その時には意識ははっきりと戻っていた。

野本病院から県立中央病院までは数分の近い距離だったが、私には、長い長い道中に思われた。

病院に到着した。沢山のスタッフお待ち受けて下さっていて、心筋梗塞に対応した処理をスタッフが連携のかけ声を掛けながら、処理室に導いて下さった。

中心になる先生(岡山先生)の的確な指示に基づき、携わる多くの若き先生が、しっかりとした応答の基に処理している様子を朦朧とする意識の中でどれほど頼もしく聞かされたか、対応処置は約三時間に渡ったのではないかと思われるが、岡山先生の自信に満ちた私の名を呼ぶ声に、はっと意識が帰っ

た。「菅田さん『心筋梗塞』対処のために今必要とされる処置をしっかりとしました。先ずは第一難関は突破しました。しかし、諸調査の結果、長期的にみて私としては満足とは言えません。まず、症状が落ち着いてから詳しくお話をしたいと考えています。今は、先ずは落ち着いていたことが大変よかったですね。今夜は集中治療室にベテラン職員が待機していますから、心落ち着けてお休みなさい。よかったですね。」

私には、何とも言えないプロフェッショナルな先生の人間味溢れるお言葉に思わず涙が自然と頬を伝わった。

熟睡出来ずに集中治療室で目を覚ました。「ご気分はいかがですか。」初めて出会った看護師さんがニコリと微笑みながら話しかけてくれたとき、不思議に心落ち着いた。その後私を取り巻く担当看護師さんのチームワークの見事に、安心、安全を感じ安堵感に浸った。生活も落ち着いた三日後、大部屋に移った。

この大部屋の小さな社会を十五日間生活経験して、ミニ社会に生きる生き方に大きな示唆を受けた。

折しも、平成二十三年三月十一日十四時二十六分に発生した未曾有の「関東大震災」の避難場所条件も雲泥の差とはいえ、隣に見知らぬ人の息遣いの中での生活には、自我、私欲を捨て気配りをしながらいかに生きていくかである

ことを強く感じた。現役時代、学生を連れ合宿したり集団宿泊を経験したことが大いにこの生活に生きて働いたことを強く感じた。

その間、岡山先生や石戸谷先生から何回となく笑顔の来室があった。「顔色がいいですね。傷口も順調に治癒してきていますね。これなら大丈夫だ。」

教育の一隅にいた私でも信頼する先生からの思いのこもった声掛けほどどれほど元氣と勇氣が湧くものかよく体感出来た。

四月十九日(水)石戸谷先生から、「手術に関するお話を夕方したいのですが、ご家族の皆様を含めお話ししたいのでよろしいでしょうか。」とお声が掛かった。説明は「医師資料室」で行われた。

説明は、「何故カテーテル処理だけで終わることが出来なかったか」について、私自身が実際に脈打ちながら活発に律動している血管の動画を克明に指示しながら理路整然と話をなされ、素人の私にも十分理解出来るものがあった。

その後、麻酔科副院長北村美智子先生から、丁寧な麻酔処置に関する説明も受けた。特に、画面に集中しながら真剣に説明されている石戸谷先生のお姿に、「命」に直面し、命の神聖さに対する畏敬の念からのお姿なのか、この方の豊かな人間性の発露に、若くて全身から発するオーラに、私は自然とこの凄く先生に「どうかよろしくお任せします。」

と熱い思いでお願ひした。

私も先生の職について四十年以上の歳月が過ぎた。私は、石戸谷先生に出会い、深く考えることがあった。

石戸谷先生は毎日直面するものが「命」である。一つの言動、一つの判断、一つの行動等々総てが生死に繋がっている人生の真剣勝負をしている。

この私はこれまで石戸谷先生の倍に近い教師生活の中で、子どもの命と対峙し、子どもの生き方を命がけて相談に乗り方向性を持ち、責任を持って育てていったか。実に恥ずかしい。今ここで、このような状態の中で石戸谷先生との出会いができるよう生きながらえたい喜びで一杯である。

最期に、入院中、常に笑顔で絶やさず的確な処置、適切な対処、総てを患者の気配りを中心にして接して下さい私を安全、安心、安堵の気持ちで退院に向かわせて下さった大勢の看護師チームの方々の素晴らしい人間味溢れる「ナース魂」(この「ナース魂」はどこからきているのだろうか。早くから人生の目標を看護師に置き、志し高く研修、研鑽に日々心掛けている所から、自然と生まれ出るものだろうか)に対し、心からの敬意と感謝の念を込めてお礼を申し上げたい。

正に、今「生かされて生きていく」

寄贈図書

わたしと俳句



山内 功 (昭三〇卒)

つちふるや来島海峡みえざりし
めつぶれば湖畔桜の八分咲き

第六回愛大同期会

蒲公英や宇和海五号大洲ゆき
春らんまん和服の似合う城下町
判決や沖繩ノート春うらら
十和田湖の船尾にむつむ夏の蝶
港湾の課長よびきし梅雨滂沱
この道は市民の道ぞ秋しぐれ

大江さんおめでと

ノーベル賞愛媛のほこり曼珠沙華
ラジオより球児の声や蓮根ほる
冬麗や森繁久弥詩碑ふたつ
悠久の来島海峡初あかり

※ ※

青年教師のころ休職し学校共済
病院で、教員仲間俳句を学び闘
病生活を文学でのりきった。

平成五年教職を辞し〈子規の国
松山の俳誌〉「砂山」に出逢い豊
田晃先生にご指導いただいた。
平成十八年現代俳句の新谷ひろ

し先生のおすすめで、「雪天」同
人となった。

私は一枚文集・俳句「来島海峡」
月刊を編集し、会員として日本作
文の会へ毎年一年分を四月に送っ
ている。

四季吟詠句集との出逢いはBS
俳句王国出演が縁で、俳人より四
季吟詠句集17を拝受。感激した。
その感動の定着が、四冊の句集
となった。

啄木のたどりし街の雪を踏む／い
さお(新谷ひろし先生選。「四季
吟詠句集19」)

望郷の一行添えし夏だより／いさ
お(伊藤敬子先生選。「四季吟詠
句集20」)

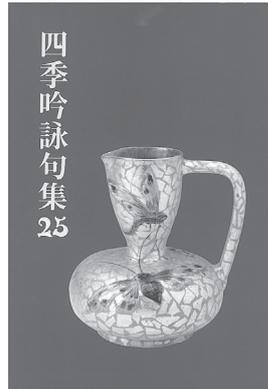
いぬふぐり星座に似たり地下兵舎
／いさお(新谷ひろし先生選。「四
季吟詠句集24」)

このたび

乾杯や新春交礼百の音／いさお
(木村敏男先生選。「四季吟詠句集
25」) 四回目の特選を得た。

ご三人の先生のおかげに感謝、
感謝である。あわせて、かつての
松山の「砂山」現在の青森の「雪
天」の仲間にも多謝である。

794-0812 今治市北高下町
114-133



四季吟詠句集25

「四季吟詠句集25」

判型 四六版 三二〇頁
発行者 松尾 正光
発行所 株式会社
東京四季出版



8歳までに
経験しておきたい科学

「8歳までに
経験しておきたい科学」

著者 JDハーレン
監訳者 MSリプキン
深田 昭三
隅田 学
発行所 株式会社
北大路書房
判型 A5版 三〇九頁

教育学部同窓会
インターネット
開設しています!

メールアドレスは上記

dosokai @ ed.ehime-u.ac.jp

お問い合わせ、会報
への寄稿、住所、勤務
先変更などの諸連絡に
ご利用ください。お待
ちしています。

教育学部同窓会
ホームページ完成!

URLは上記

http://www.ed.ehime-u.
ac.jp/~dosokai/

支部活動、会合
イベント等のスケ
ジュールなど、タ
イムリーに情報を
お知らせします。
同窓会員同士の
交流を深めるため
に、できれば、掲
示板を設ける準備
をしています。

会報送料・寄付者名

平成23・2・1

森貞聰 井門義男 仁木省三 高橋大蔵 細井愛子 大野久子 松本修 山本茂慎 高橋洋三 藤原嘉代子 合田宏明 横濱雄幸 芳野昭子 薬師正則 丹下友和 正岡和夫 渡辺淳美 松本有子 阿部正幸 兵藤豊子 青野艶美 保科理恵 藤田昭禎 伊藤藤禎

原稿募集

次号 第百十三号

短くても結構です。多くの方々のお気軽なご寄稿をお待ちしております。

○「会員の声」・「今、教育に思うこと」について、ふるってご投稿下さい。

★ 同期会や支部同窓会などの集会や活動について

★ 恩師・先輩・同僚の訪問や思い出について

★ 職場の近況や所感や活動について

★ 文芸(随想・俳句・川柳・短歌・詩・絵手紙等)について

★ 会員便り

1 旅行記 4 この頃思うこと 2 季節便り 5 忘れ得ぬ人など 3 教育雑感

※ 投稿が多数になった場合には、編集委員会では選ばせていただきますので、ご了承ください。

★ 原稿切 十一月三十日

★ 発行 二月一日 予定

★ 依頼者以外は千二百字厳守

四〇〇字詰原稿用紙の一行を十五字にして書いて下さい。

★ 写真 筆者の顔写真を添付してください。顔写真以外で内容に関連した写真もあれば送ってください。

敬弔

(物故会員)

(死亡年月日)

(氏名)

23・1・26	23・1・25	23・1・21	23・1・20	23・1・20	23・1・19	23・1・16	23・1・14	23・1・12	23・1・8	23・1・7	23・1・5	22・12・31	22・12・29	22・12・26	22・12・25	22・12・20	22・8・14	(氏名)	
井手光子	和家文展	宇都宮官七	矢野欣二	中野勲	山之内富貴子	八木正夫	土居通泰	山本尚則	大森尚敏	久保善幸	稲屋福一	稲井玉好	松浦武	影山健治	梅岡文雄	鶴原清一	下田和	(氏名)	
23・3・16	23・3・16	23・3・15	23・3・7	23・3・3	23・3・1	23・3・1	23・3・1	23・2・28	23・2・24	23・2・22	23・2・20	23・2・19	23・2・19	23・2・17	23・2・14	23・2・14	23・2・8	23・2・1	23・1・29
中村貞子	長尾正巳	金崎久男	酒井孝	竹内嘉重	永木孝	池田重雄	中田豊	土居一郎	窪時雄	白石純雄	吉田修	赤松明德	日野佳孝	宮岡計	武智覚民	河内喜代晴	伊藤青	田中俊秀	二宮和長
23・5・26	23・5・26	23・5・14	23・5・14	23・5・13	23・5・5	23・5・5	23・5・5	23・5・4	23・5・2	23・4・28	23・4・27	23・4・27	23・4・17	23・4・9	23・4・7	23・3・24	23・3・22	23・3・21	23・3・21
丹下武志	中嶋孝志	岡田哲郎	西部信和	佐々木健吾	渡部盛幹	林喜代子	井関修	安井良一	徳田稔	稲荷正明	村上義男	古谷次郎	門屋武雄	山口守	安岡芳朗	青木貢生	森本マサ子	阿部義人	

平成23年度

支 部 長 会 報 告

1. 日 時 平成22年6月11日（土） 10:00～13:00
2. 場 所 朋友会館（松山市樋又10-13 愛大本部）2F大会議室

3. 日 程
- (1) 開 会 あいさつ 会長・学部長
 - (2) 各支部長あいさつ
 - (3) 議長選出
 - (4) 議事
 - ア 会則改正について
 - イ 役員改選に関する件
 - ★ 退任役員表彰
 - ★ 新旧役員あいさつ
 - ウ 県外新支部（岡山支部）開設に関する件
 - エ 平成22年度行事報告
 - オ 平成22年度決算報告・監査報告
 - カ 平成23年度行事計画
 - キ 平成23年度予算案審議
 - ク 支部活動と助成金について
 - ケ その他事務連絡
(内規に関する事項・会報発送・会館利用・名簿 等)
 - (5) 閉会 あいさつ 副会長



4. 主な話し合い事項

- (1) 支部活動の活性化について
各支部長からの提言を元に、支部活動をいかに活性化するかについて時間を掛けて話し合われた。県下のトップを切って、21年度、伊予支部が「はばたけ伊予っ子」の旗印の下伊予支部同窓会主催、会員一人一役で「伊予地区児童生徒の芸能・文化活動」の発表会を開催し、大成功を納めた事例をもとに話し合った。各支部とも、予算が位置づけられているので、積極的な活動を公民館等と協力して計画してみてもとの提言があった。
- (2) 教育学部と同窓会との連携活動について
今年度は、予算にも位置づけ、教育学部では「サポーター制度」を設け、同窓生に働きかけ、講師になってもらい「コミュニケーション能力の育成」をテーマに、学生達に講演している。非常に学生に好評であり、今後とも学部と同窓会との絆を強めるため同窓会はこの協力をしようと意志決定した。
- (3) 「支部活動特別助成金」について
支部活動をより活性化するための具体的な方策として、上記にある「支部活動特別助成」を配慮している。その為の資料として、「伊予支部活動の資料」「支部活動特別助成金交付要綱」と「申請手続き」を紹介した。
- (4) 今年度から、県外支部の新設があった。それは、岡山県支部で岡田潤岡山新支部長がこの会に参加し挨拶をして頂いた。全員一致、承認と歓迎の拍手があった。
- (5) 今年度、顧問、会長、副会長に異動があった。顧問は兵頭寛氏がご勇退され、これまで6年間同窓会改革にご尽力された奥定一孝会長が顧問職に、その間副会長として会長補佐としてご尽力されていた高橋次郎氏が会長に、昨年度まで副会長の垂水葉子氏のご勇退され、そのあとを新しく山本千鶴子氏が就任された。

以上



平成 23 年度 行 事 計 画

4. 6 (水)	平成23年度入学式	学部生 236名 院生 50名
4. 27 (水)	第1回常任理事会	役員改選・同窓会活動・支部活動について
5. 16 (月)	平成22年度会計監査	平成23年4月14日(木) 監査実施
5. 21 (土)	第1回理事会	平成22年度行事、決算報告 平成23年度行事計画及び予算審議 役員改選案について審議
6. 2 (木)	学部サポーター制による講義	浜田純子氏による学生への「大人のマナー講座」
6. 11 (土)	支部長会	平成23年度本部役員改選 平成22年度行事、決算報告 平成23年度行事計画及び予算審議
6. 14 (火)	第1回編集委員会	会報112号 校正
7. 1 (金)	会報112号発行	9,000部
7. 26 (火)	第2回常任理事会	後期同窓会活動・支部活動について
8. 6 (土)	第2回理事会	後期活動について
11. 10 (木)	学部サポーター制による講義	女優加藤富子氏の「魅力的な話し方講座」〈仮称〉
12. 10 (土)	第3回常任理事会	後期の諸計画・次年度諸活動について
12. ()	伊予支部等支部活動	伊予支部等支部活動助成
1. 6 (金)	第3回理事会	年間行事の反省 新年度諸計画について
1. 12 (木)	第2回編集委員会	会報113号 校正
2. 1 (水)	会報113号発行	9,000部
3. 3 (土)	第4回常任理事会	23年度行事活動反省、次年度重点活動目標設定について
3. 24 (土)	平成23年度卒業式	卒業記念文鎮・会報

平成22年度 決 算 書

平成23年度 予 算 書

(収入の部)

△…減

費目	予 算	決 算	増 減	摘 要
1. 会 費	0	0	0	
2. 終身会費	5,200,000	5,240,000	△ 40,000	入学者244名+18名
3. 雑 収 入	200,000	263,260	△ 63,260	利息、送料・寄付金等
4. 繰 越 金	3,037,846	3,037,846	0	
計	8,437,846	8,541,106	△ 103,260	

(支出の部)

費目	予 算	決 算	増 減	摘 要
1. 会 議 費	750,000	317,673	432,327	支部長会・理事会
2. 旅 費	600,000	432,500	167,500	支部長会
3. 印 刷 費	1,500,000	1,205,500	294,500	会報年2回
4. 通 信 費	550,000	349,110	200,890	会報発送、連絡費
5. 慶 弔 費	150,000	30,000	120,000	
6. 給 与 費	800,000	800,000	0	
7. 備 品 費	700,000	46,200	653,800	
8. 消 耗 品 費	350,000	128,706	221,294	封筒、ラベル・コピー代等
9. 支 部 助 成 費	650,000	439,600	210,400	
10. 卒 業 記 念 費	400,000	374,850	25,150	文鎮
11. 国 際 交 流 基 金	250,000	250,000	0	
12. 雑 費	750,000	192,960	557,040	
13. 予 備 費	987,846	702,057	285,789	
計	8,437,846	5,269,156	3,168,690	

(収入の部)

△…減

費目	本 年 度	前 年 度	増 減	摘 要
1. 会 費	0	0	0	
2. 終身会費	5,240,000	5,200,000	40,000	入学者242名+20名
3. 雑 収 入	250,000	200,000	50,000	利息、送料・寄付金等
4. 繰 越 金	3,271,950	3,037,846	234,104	
計	8,761,950	8,437,846	324,104	

(支出の部)

費目	本 年 度	前 年 度	増 減	摘 要
1. 会 議 費	750,000	750,000	0	支部長会・理事会
2. 旅 費	650,000	600,000	50,000	支部長会
3. 印 刷 費	1,600,000	1,500,000	100,000	会報年2回
4. 通 信 費	650,000	550,000	100,000	会報発送、連絡費
5. 慶 弔 費	150,000	150,000	0	
6. 給 与 費	800,000	800,000	0	
7. 備 品 費	700,000	700,000	0	
8. 消 耗 品 費	470,000	350,000	120,000	封筒、ラベル、コピー代等
9. 支 部 助 成 費	650,000	650,000	0	
10. 卒 業 記 念 費	400,000	400,000	0	文鎮(ペーパーウエイト)
11. 国 際 交 流 基 金	250,000	250,000	0	
12. 支 部 活 動 支 援 費	600,000	0	600,000	
13. 学 部 活 動 支 援 費	500,000	0	500,000	
14. 雑 費	200,000	750,000	△ 550,000	
15. 予 備 費	391,950	987,846	△ 595,896	
計	8,761,950	8,437,846	324,104	

平成 23 年度 役 員 表

愛媛大学教育学部同窓会

本 部	顧問	壽 卓 三・奥 定 一 孝		監 事	後 藤 陽 三	常任幹事	菅 田 顯
	会 長	高 橋 治 郎			替 地 和 人		
	副 会 長	立 入 哉	峯 本 高 義	村 上 朋 子	友 近 温 壽	山 本 千 鶴 子	
	理 事		千 村 孝 明	菊 地 祥 裕	菊 川 國 夫	満 田 泰 三	村 上 嘉 一
			鎌 田 サチ子	山 下 雅 司	石 丸 淳	阿 部 晋	石 尾 憲 弘
			和 田 和 子	押 岡 佳 子	菊 池 晶 子	白 石 久 美 子	辻 井 芽 美 子
		堀 内 寿 夫	烏 谷 真 由 美	安 田 智 美	香 川 育 代	白 石 貴 士	
	在 間 正 樹	西 野 教 大					

支 部 名		支 部 長		副 支 部 長		副 支 部 長		
県 内 支 部	四 国 中 央 市	川之江・新宮	三 好 伊 佐 子	金生第一小	吉 田 太	川之江北中	高 木 淳	金生第一小
		伊予三島	鈴 木 惠 子	豊 岡 小	河 村 智 恵 美	中 之 庄 小	細 川 真 弓	中 曾 根 小
		土 居	和 田 貴 臣 男	小 富 士 小	長 瀬 陽 子	北 小	山 川 小 百 合	土 居 小
	新 居 浜	横 井 敏 行	大 生 院 中	越 智 正 信	新 居 浜 南 中	中 野 久	多 喜 浜 小	
	西 条	伊 藤 俊	西 条 東 中	秋 山 穂 積	飯 岡 小	加 藤 美 江	大 町 小	
	東 予・周 桑	磯 明	周 布 小	酒 井 敦 夫	田 野 小	越 智 恵 里 子	吉 井 小	
	今 治	國 政 保 徳	日 吉 小	橋 田 一 美	別 宮 小	井 原 涉	波 方 小	
	今 治・越 智	金 本 圭 介	上 浦 中	渡 邊 建 男	大 三 島 中	渡 部 守	上 浦 小	
	松 山・北 条	永 野 幸 男	北 条 小	石 丸 満 郎	正 岡 小	城 本 す み 江	立 岩 小	
	松 山	後 藤 陽 三	桑 原 小	白 石 幸 枝	潮 見 小	森 健	津 田 中	
	東 温	高 須 賀 秀 喜	拝 志 小	本 田 隆 彦	北 吉 井 小	渡 邊 裕 子	川 上 小	
	伊 予	田 中 勝 子	北 伊 予 小	山 田 智 香 子	伊 予 小	吉 田 京 子	中 山 小	
	上 浮 穴	渡 部 哲 也	面 河 小	小 野 敏 信	久 万 中	高 田 誠	久 万 中	
	大 洲	上 田 敏	大 洲 小	岡 田 廣 温	新 谷 小	垣 見 節 子	喜 多 小	
	喜 多	津 國 巳 代 子	參 川 小	菊 地 啓 二	小 田 小	餘 家 幹 子	御 祓 小	
	八 幡 浜	井 上 庸 子	喜 須 来 小	桐 島 日 出 夫	長 谷 小	大 西 逸 子	舌 田 小	
	西 宇 和	辰 野 晴 美	九 町 小	末 光 礼 子	三 崎 中	小 倉 和 芳	二 見 小	
	西 予	佐 藤 光 博	大 野ヶ 原 小	勇 功	周 木 小	浅 野 尚 也	二 木 生 小	
宇 和 島	都 築 高 秀	下 灘 小	矢 野 淳 一	明 倫 小	清 家 美 津 子	天 神 小		
北 宇 和	松 浦 幹 生	広 見 中	永 井 悟	松 野 南 小	古 谷 玲 子	好 藤 小		
南 宇 和	若 田 正	僧 都 小	安 岡 宏 次	御 荘 中	濱 見 陽 計	長 月 小		
附 属	香 川 育 代	附 特 別 支 援						

県 外 支 部	東 京	兼 頭 吉 市	山 下 正 洋	森 孝 枝
	京 都	河 野 直 樹		
	大 阪	神 垣 哲 雄	本 宮 久	杉 山 容 子
	神 戸	木 原 孝 造	平 山 昇	加 登 康 智
	岡 山	岡 田 潤		

編 集 委 員	菅 田 顯	峯 本 高 義	菊 川 國 夫	村 上 朋 子	山 下 雅 司
---------	-------	---------	---------	---------	---------

愛媛大学と山形大学合同 第1回卒業・修了合同美術展覧会を開催しました

2011年3月、愛媛大学と山形大学で「第1回卒業・修了合同美術展覧会」をサテライトオフィス東京にて開催しました。山形大学は5年前からサテライトオフィス東京で、卒業・修了制作展を実施していましたが、今回のような合同の展覧会は両大学にとって初の試みです。

【展覧会概要】

□会場：サテライトオフィス東京（東京都港区芝浦3-3-6キャンパス・イノベーションセンター）

□参加者

- ・愛媛大学教育学部芸術文化課程造形芸術コース4回生：9名
- ・山形大学地域教育文化学部文化創造学科造形芸術コース/大学院地域教育文化研究科文化創造専攻造形芸術分野：21名

□開催期間：2011年3月1日～3月6日

3月1日：作品の搬入・設置

3月2日：オープンセレモニー

（本式典には山形大学と愛媛大学の両学長に加え、愛媛大学の教育学部長に出席頂きました。）

3月5日：山形大学OBセミナーがサテライトオフィス東京にて開催され、多くの方々に展覧会をみて頂きました。

3月6日：作品の撤去・搬出



オープンセレモニーの様子



ギャラリートークの様子



作品①



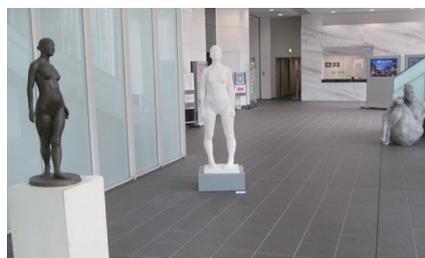
作品②



作品③



会場の様子①



会場の様子②



作品④

【展覧会を終えて】

愛媛大学と山形大学との合同で卒業制作展を実施する初の試みであった本展覧会は、集客や展示の方法で課題を残したものの、今後の発展を期待できるものであったと思います。本取り組みをここで終わらせるのではなく、この経験を糧にこれからも学生とともに日々精進し、その成果を発信できる場を今後もつくっていききたいと思います。

最後になりましたが、本展覧会を開催する機会を与えてくださったサテライトオフィス東京の横田さんや、当時、教育学部事務課長であった高橋さんをはじめ、お世話になった皆様はこの場をかりてお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。